

世の譬にも天生時^{あまうけ}は蒼空^{あをぞら}に雨^{あめ}が降るといふ、人の話にも神代^{かみよ}から杣^まが手^てを入れぬ森^{もり}があると聞いたのに、今までは餘り樹^きがなさ過ぎた。

今度は蛇^{へび}のかはりに蟹^{かに}が歩きさうで草鞋^{わらぢ}が冷えた。暫くすると暗くなつた、杉、松、榎と處々見分けが出来るばかりに遠い處から幽に日の光の射すあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森を射通す工合であらう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい處があつた。

時々爪尖^{つめさき}に絡まるのは葉の雫^{しづく}の落溜^{おちたま}つた絲のやうな流で、これは枝を打つて高い處を走るので。ともすると又常磐木^{またまきはぎ}が落葉する、何の樹とも知れずばらばらと鳴り、かさ／＼と音がしてばつと檜笠^{ひのきかさ}にかゝることもある、或は行過ぎた背後へこぼれるのもある、其等は枝から枝に溜つて居て何十年ぶりではじめて地の上まで落ちるのか分らぬ。」

八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯な様でも修行の積まぬ身には、恙^かう云ふ暗い處の方が却つて觀念に便が宜い。何しろ體が凌ぎよくなつたために足の弱も忘れたので、道も大きに抄取つて、先づこれで七分は森の中を越したらうと思ふ處で五六尺天窓の上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち留まつたものがある。

鉛の錘^{なまりのおもり}かとおもふ心持、何か木の實^みでもあるか知らんと、二三度振つて見たが附着いて居て其まゝには取れないから、何心なく手をやつて掴むと、滑らかに冷りと來た。

見ると海鼠^{なまこ}を裂いたやうな目も口もない者ぢやが、動物には違ひない。不氣味で投出さうとするとする／＼と這つて指の尖へ吸ついてぶらりと下つた、其の放れた指の尖から眞赤な美しい血が垂々と出たから、吃驚して目の下へ指をつけておつと見ると、今折曲げた肱^{ひぢ}の處へつると懸つて居るのは同形をした、幅が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

呆氣^{あつけ}に取られて見る／＼内に、下の方から縮みながら、ぶく／＼と太つて行くのは生血をしたたかに吸込む所爲で、濁つた黒い滑らかな肌^{はだ}に茶褐色の縞をもつた、疣^{いぼ}胡瓜^{ごり}のやうな血を取る動物、此奴は蛭ぢやよ。

誰が目にも見違へるわけのものではないが、鬪拔^{ぶつ}て餘り大きいから一寸は氣がつかぬであつた、何の蟲でも、甚麼履歴のある沼でも、此位な蛭はあらうとは思はれぬ。

肱をばさりと振つたけれど、よく喰込んだと見えてなか／＼放れさうにしないから不氣味ながら手で抓んで引切ると、ぶつりといつてやう／＼取れる、暫時も耐つたものではない、突然取つて大地へ叩きつけると、これほどの奴等が何萬となく巢をくつて我ものにして居ようといふ處、豫て其の用意はして居ると思はれるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔い、潰れさうにも

ないのぢや。

と最早や頸のあたりがむす／＼して来た、平手で扱て見ると横撫に蛭の背をぬる／＼とすべるといふ、やあ、乳の下へ潜んで帯の間にも一疋、蒼くなつてそつと見ると肩の上にも一筋。思はず飛上つて總身を震ひながら此大枝の下を一散にかけぬけて、走りながら先づ心覚えの奴だけは夢中でもぎ取つた。

何にしても恐しい今の枝には蛭が生つて居るのであらうと餘の事に思つて振返ると、見返つた樹の何の枝か知らず矢張幾ツといふこともない蛭の皮ぢや。

これはと思ふ、右も、左も、前の枝も、何の事はなまるで充満。

私は思はず恐怖の聲を立てて叫んだ、すると何と？ 此時は目に見えて、上からぼたり／＼と眞黒な瘦せた筋の入つた雨が體へ降か、つて来たではないか。

草鞋を穿いた足の甲へも落ちた上へ又累り、竝んだ傍へ又附着いて爪先も分らなくなつた、然うして生きてると思ふだけ脈を打つて血を吸ふやうな、思ひなしか一ツ／＼伸縮をするやうなのを見るから氣が遠くなつて、其時不思議な考へが起きた。

此の恐しい山蛭は神代の古から此處に屯をして居て、人の來るのを待ちつけて、永い久しい間に何の位何斛かの血を吸ふと、其處でこの蟲の望が叶ふ、其の時はありつたけの蛭が不殘吸つた

だけの人間の血を吐出すと、其がために土がとけて山一ツ一面に血と泥との大沼にかはるであらう、其と同時に此處に日の光を遮つて晝もなほ暗い大木が切々に一ツ一ツ蛭になつて了ふのに相違ないと、いや、全くの事で。」

九

「凡そ人間が滅びるのは、地球の薄皮が破れて空から火が降るのでもなければ、大海が押被さるのでもない、飛驒國の樹林が蛭になるのが最初で、しまひには皆血と泥の中に筋の黒い蟲が泳ぐ、其が代がはりの世界であらうと、ぼんやり。

なるほど此の森も入口では何の事もなかつたのに、中へ來ると此通り、もつと奥深く進んだら早や不殘立樹の根の方から朽ちて山蛭になつて居よう、助かるまい、此處で取殺される因縁らしい、取留めのない考へが浮んだのも人が知死期に近いたからだと弗と氣が付いた。

何の道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見て置かうと、然う覺悟が極つては氣味の悪いも何もあつたものぢやない、體中珠數生になつたのを手當次第に搔い除け撈り棄て、抜き取りなどして、手を擧げ足を踏んで、宛で躍り狂ふ形で歩行き出した。

はじめの中は一廻も太つたやうに思はれて痒さが耐らなかつたが、しまひにはげつそり瘦せた
と感ぜられてつき／＼痛んでならぬ、其上を容赦なく歩行く内にも入交りに襲ひをつた。

既に目も眩んで倒れさうになると、禍は此邊が絶頂であつたと見えて、隧道を抜けたやうに、
遙に一輪のかすれた月を拜んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空の下へ出た時には、何のことも忘れて、碎ける、微塵になれと横なぐりに體を山路へ
打倒した。それでからもう砂利でも針でもあれと地へこすりつけて、十餘りも蛭の死骸を引くり
かへした上から、五六間向うへ飛んで身顛をして突立つた。

人を馬鹿にして居るではありませんか。あたりの山では處處々茅蜩殿、血と泥の大沼にならうと
いふ森を控へて鳴いて居る、日は斜、溪底はもう暗い。

先づこれならば狼の餌食になつても其は一思に死なれるからと、路は丁度だら／＼下なり、小
僧さん、調子はづれに竹の杖を肩にかついで、すたこら遁げたわ。

これで蛭に惱まされて痛いのか、痒いのか、それとも擦つたいのか得もいはれぬ苦しきさへな
かつたら、嬉しさに獨り飛驒山越の間道で、御經に節をつけて外道躡をやつたであらう、一寸清
心丹でも嚙碎いて疵口へつけたら何うだと、大分世の中の事に氣がついて來たわ。抓つても確に
活返つたのぢやが、夫にしても富山の藥賣は何うしたらう、那の様子では疾に血になつて泥沼に。

皮ばかりの死骸は森の中の暗い處、おまけに意地の汚い下司な動物が骨までしやぶらうと何百と
いふ數でのしか、つて居た日には、酢をぶちまけても分る氣遣はあるまい。

恚う思つて居る間、件のだら／＼坂は大分長かつた。

其を下り切ると流が聞えて、飛んだ處に長さ一間ばかりの土橋がか、つて居る。

はや其の谷川の音を聞くと我身で持餘す蛭の吸殻を眞逆に投込んで、水に浸したら嘔可い心地
であらうと思ふ位、何の渡りかけて壊れたら夫なりけり。

危いとも思はずにすつと懸る、少しぐら／＼としたが難なく越した。向うから又坂ぢや、今度
は上りさ、御苦勞千萬。」

十

「到底も此の疲れやうでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途に、ヒイ、ンと馬
の嘶くのが訝して聞えた。

馬士が戻るのか小荷駄が通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の経つたは僅ぢやが、三年も
五年も同一ものをいふ人間とは申を隔てた。馬が居るやうでは左も右も人里に縁があると、之が
ために氣が勇んで、え、やつと今一揉。

一軒の山家の前へ来たのには、然まで難儀は感じなかつた、夏のことと戸障子のしまりもせず、殊に一軒家、あけ開いたなり門というてもない、突然破縁になつて男が一人、私はもう何の見境もなく、

(頼みます、頼みます)といふさへ助を呼ぶやうな調子で、取繕らぬばかりにした。

(御免なさいまし)といつたがものもいはない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ぐほど顔を横にしたまゝ、小兒らしい、意味のない、然もぼつちりした目で、じろくくと門に立つたものを瞻める、其の瞳を動かさずさへ、おつくふらしい、氣の抜けた身の持方。裾短かで袖は肱より少い、糊氣のある、ちやんくを着て、胸のあたりで紐で結へたが、一ツ身のものを着たやうに出ッ腹の太り肉、太鼓を張つたくらるるに、すべくとふくれて然も出臍といふ奴、南瓜の帯ほどな異形な者を片手でいぢくりながら幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくば暖簾を立てたやうに畳まれさうな、年紀が其で居て二十二三、口をあんぐりやつた上唇で巻込めよう、鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鶏冠の如くになつて、頸脚へ撥ねて耳に被つた、啞か、白癡か、これから蛙にならうとするやうな少年。私は驚いた、此方の生命に別條はないが、先方様の形相。いや、大別條。

(一寸お願ひ申します。)

それでも爲方がないから又言葉をかけたが少しも通ぜず、ばたりといふと僅に首の位置をかへて今度は左の肩を枕にした、口の開いてること舊の如し。

恚云ふのは、悪くすると突然ふんづかまへて臍を捻りながら返事のかはりに嘗めようも知れぬ。私は一足退つたが、いかに深山だといつても是を一人で置くといふ法はあるまい、と足を爪立てて少し聲高に、

(何方ぞ、御免なさい)といつた。

背戸と思ふあたりで再び馬の嘶く聲。

(何方)と納戸の方でいつたのは女ぢやから、南無三寶、此の白い首には鱗が生えて、體は床を這つて尾をすくくと引いて出ようと、又退つた。

(お、御坊様)と立顯れたのは小造の美しい、聲も清しい、ものやさしい。私は大息を吐いて、何にもいはず、

(はい)と頭を下げましたよ。

婦人は膝をついて坐つたが、前へ伸上るやうにして、黄昏にしよんぼり立つた私が姿を透かして見て、

(何か用でござんすかい。)

休めともいはずはじめから宿の常世は留守らしい、人を泊めないと極めたもののやうに見える。

いひ後れては却つて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕誼にもなることと、つかくつと前へ出た。
丁寧ていねいに腰こしを屈かめて、

(私は、山越やまこえで信州しんしゅうへ参ります者ものですが旅籠はたごのごさいます處ところまでは未だ何なにの位くらゐでございませう。)

十一

(貴方あなたまだ八里餘りあまりでございますよ。)

(其他そのほかに別に泊めてくれます家うちもないのでせうか。)

(其それはございませぬ。)といひながら目めた、きもしないで清すしい目で私の顔かほをつくく見みて居た。

(いえもう何なんでございます、實じつは此先このさき一町行いけ、然さうすれば上段じやうだんの室むに寝ねかして一晩ひとばん扇あふいで居て其それで功德とくどくのためにする家うちがあると承うけたまりまして、全まったくの處ところ一足ひとあしも歩行あるけますのではございませぬ、何處どこの物置もの置きでも馬小屋うまごやの隅すみでも宜よいのでございしますから後生ごしやうでございします。)と先刻さつき馬うまの嘶いないたのは此家こゝより外ほかにはないと思おもつたから言いつた。

婦人をんなは暫しばらく考かんがへて居たが、弗ふと傍わきを向むいて布ぬのの袋ふくろを取とつて、膝ひざのあたりに置おいた桶けの中なかへざら

ざらと一幅ひとはら、水みづを溢こぼすやうにあげて縁ふちをおさへて、手てで掬くつて俯うつむいて見たが、

(あ、お泊とめ申ましませう、丁度ちやうど炊たいてあげますほどお米こめもございしますから、其それに夏なつのことで、山家やまがは冷ひえましても夜よるのものに御不自由ごふじゆうもござんすまい。さあ、左ひだりも右みぎもあなた、お上り遊あそばし

て。)といふと言葉ことばの切れぬ先にどつかと腰こしを落おした。婦人をんなは衝つと身みを起おして立たつて來きて、

(御坊様おぼうさま、それでござんすが一寸御斷ごことわり申まして置おかねばなりません。)

(唯はい、はい。)

(否い、別べつのことぢやござんせぬが、私わたしは癖くせとして都みやこの話はなしを聞きくのが病やまひでございします、口くちに蓋ふたをしておいでなさいまして無理むりやりにも聞きかうといたしますが、あなた忘れても其時そのとき聞きかして下くださいますな、可ようござんすかい、私わたしは無理むりにお尋たづね申まします、あなたは何なにうしてもお話はなしなさいませぬ、其それを是非せひにと申ましましても斷たつて仰おつしや有あらないうやうに屹きつと念ねんを入れて置おきますよ。)

と仔細しさいありげなことをいつた。
山やまの高たかさも谷たにの深ふかさも底そこの知しれない一軒家いっけんやの婦人をんなの言葉ことばとは思おもうたが保たもつにむづかしい戒かでもなし、私わたしは唯ただ願ねがふばかり。

(唯、宜しうございます、何事も仰有りつけは背きますまい。)
婦人は言下に打解けて、

(さあ、汚うございますが早く此方へ、お寛きなさいまし、然うしてお洗足を上げませうかえ。)

(いえ、其には及びませぬ、雑巾をお貸し下さいまし。あ、それからもし其のお雑巾次手につツぶりお絞んなすつて下さると助ります、途中で大變な目に逢ひましたので體を打棄りたいほど氣味が悪うございますので、一ツ背中を拭かうと存じますが、恐入りますな。)

(然う、汗におなりなさいました、嘸ぞまあ、お暑うござんしたでせう、お待ちなさいまし、旅籠へお着き遊ばして湯にお入りなさいますが、旅するお方には何より御馳走だと申しますね、湯どころか、お茶さへ碌におもてなしいたされませんが、那の、此の裏の崖を下りますと、綺麗な流がございますから一層其へ行らつしやつてお流しが宜うございませう。)

聞いただけでも飛んでも行きたい。

(え、其は何より結構でございますな。)

(さあ、其では御案内申ませう、どれ、丁度私も米を磨ぎに参ります。と件の桶を小脇に抱へて、縁側から、藁草履を穿いて出たが、屈んで板縁の下を覗いて、引出したのは一足の古下駄で、

かちりと合して埃を拂いて揃へて呉れた。

(お穿きなさいまし、草鞋は此處にお置きなすつて、)

私は手をあげて、一禮して、

(恐入ります、これは何うも、)

(お泊め申すとなりましたら、あの、他生の縁とやらでござんす、あなた御遠慮を遊ばしますなよ。先づ恐しく調子が可いぢやて。)

十二

「(さあ、私に跟いて此方へ、)と件の米磨桶を引抱へて手拭を細い帯に挟んで立つた。髪は房りとするのを束ねてな、櫛をはさんで簪で留めて居る、其の姿の佳さというてはなかつた。

私も手早く草鞋を解いたから、早速古下駄を頂戴して、縁から立つ時一寸見ると、それ例の白癡殿ぢや。

同じく私が方をじろりと見たつけよ、舌不足が饒舌るやうな、愚にもつかぬ聲を出して、(姉や、こえ、こえ。)といひながら氣だるさうに手を持上げて其の蓬々と生えた天窓を撫でた。

(坊さま、坊さま?)

すると婦人が、下ぶくれな顔にゑくぼを刻んで、三ツばかりはきく〜と續けて頷いた。

少年はうむといつたが、ぐたりとして又臍をくり〜。

私は餘り氣の毒さに顔も上げられないで密つと盗むやうにして見ると、婦人は何事も別に氣に懸けては居らぬ様子、其ま、後へ跟いて出ようとする時、紫陽花の花の蔭からぬいと出た一名の親仁がある。

背戸から廻つて來たらしい、草鞋を穿いたなりで、胴亂の根付を紐長にぶらりと提げ、銜煙管をしながら竝んで立停つた。

(和尚様おいでなさい。)

婦人は其方を振向いて、

(をぢ様何うでござんした。)

(然ればさの、頓馬で間の抜けたといふのは那のことかい。根ツから早や狐でなければ乗せ得さうにもない奴ぢやが、其處はおらが口ぢや、うまく仲人して、二月や三月はお嬢様が御不自由のねえやうに、翌日はものにして澤山と此處へ擔ぎ込みます。)

(お頼み申しますよ。)

(承知、承知、お、嬢様何處さ行かつしやる。)

(崖の水まで二寸。)

(若い坊様連れて川へ落つこちさつしやるな。おら此處に眼張つて待つ居るに、)と横様に縁にのさり。

(貴僧、あんなことを申しますよ。と顔を見て微笑んだ。)

(一人で参りませう)と傍へ退くと、親仁は吃々と笑つて、

(は、は、は、さあ、早くいつてござらつせえ。)

(をぢ様、今日はお前、珍しいお客がお二方ござんした、恠う云ふ時はあとから又見えようも知れませんが、次郎さんばかりでは來た者が弱んなさう、私が歸るまで其處に休んで居ておくれでないか。)

(可いもの。といひかけて、親仁は少年の傍へにじり寄つて、鐵槌を見たやうな拳で、背中をどんとくらはした、白癩の腹はだぶりとして、べそをかくやうな口つきで、にやりと笑ふ。)

私は悚氣として面を背けたが婦人は何氣ない體であつた。

親仁は大口を開いて、

(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りませうか。)

背後から親仁が見るやうに思ったが、導かるゝまゝに壁について、彼の紫陽花のある方ではない。

聴て背戸と思ふ處で左に馬小屋を見た、ことゝといふ音は羽目を蹴るのであらう、もう其邊から薄暗くなつて来る。

(貴僧、こゝから下りるのでございます、迂りはいたしませぬが、道が酷うございますからお静に、)といふ。

十三

「其處から下りるのだと思はれる、松の木の細くつて度外れに脊の高い、ひよろゝした凡そ五六間上までは小枝一ツもないのがある。其中を潜つたが、仰ぐと梢に出て白い、月の形は此處でも別にかはりは無かつた、浮世は何處にあるか十三夜で。

先へ立つた婦人の姿が目さきを放れたから、松の幹に掴まつて覗くと、つい下に居た。

仰向いて、

(急に低くなりますから氣をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたか不知、宜し

くば草履とお取交へ申しませう。)

立後れたのを歩行悩んだと察した様子、何が扱轉げ落ちて早く行つて蛭の垢を落したさ。

(何、いけませんければ跣足になります分のこと、何卒お構ひなく、嬢様に御心配をかけては濟みません。)

「あれ、嬢様ですつて、)と稍調子を高めて、艶麗に笑つた。

(唯、唯今あの爺様が、然やう申しましたやうに存じますが、夫人でございませうか。)

(何にしても貴僧には叔母さん位な年紀ですよ。まあ、お早くいらつしやい、草履も可うござんすけれど、刺がさゝりますと不可ません、それにじくゝ濡れて居てお氣味が悪うございませうから。)と向う向でいひながら衣服の片褻をぐいとあげた。眞白なのが暗まぎれ、歩行くと霜が消えて行くやうな。

すんゝすんゝと道を下りる、傍らの叢から、のさゝと出たのは蟄で。

(あれ、氣味が悪いよ。)といふと婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。

(お客様が被在しやるではないかね、人の足になんか翳まつて、贅澤ぢやあないか、お前達は蟲を吸つて居れば澤山だよ。)

貴僧すんゝ入らつしやいな、何うもしはしません。慙云ふ處ですからあんなものまで人

懐しうございます、厭ぢやないかね、お前達と友達を見たやうで可愧い、あれ可けませんよ。

藁はのさくと又草を分けて入つた、婦人はむかうへずいと。

(さあ此の上へ乗るんです、土が柔かで壊えますから地面は歩行かれませんが)

いかにも大木の僵れたのが草がぐれに其の幹をあらはして居る、乗ると足駄穿で差支へがない、丸木だけれども可恐しく太いので、尤もこれを渡り果てると忽ち流の音が耳に激した、それまでには餘程の間。

仰いで見ると松の樹はもう影も見えない、十三夜の月はすつと低うなつたが、今下りた山の頂に半ばかゝつて、手が届きさうにあざやかだけれども、高さは凡そ計り知られぬ。

(貴僧、此方へ。)

といつた婦人はもう一息、目の下に立つて待つて居た。

其處は早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかゝつて此處によどみを作つて居る、川幅は一間ばかり、水に臨めば音は然までもないが、美しさは玉を解いて流したやう、却つて遠くの方で凄じく岩に碎ける響かする。

向う岸は又一座の山の裾で、頂の方は眞暗だが、山の端から其山腹を射る月の光に照し出された邊からは大石小石、榮螺のやうなの、六尺角に切出したの、劍のやうなのやら、鞠の形をした

のやら、目の届く限り不残岩で、次第に大きく水に蘸つたのは唯小山のやう。

十四

「(可い鹽梅に今日は水がふえて居りますから、中へ入りませんが、此上でも可うございます。)

甲を浸して爪先を屈めながら、雪のやうな素足で石の盤の上に立つて居た。

自分達が立つた側は、却て此方の山の裾が水に迫つて、丁度切穴の形になつて、其處へ此の石を嵌めたやうな詭。川上も下流も見えぬが、向うの彼の岩山、九十九折のやうな形、流は五尺、三尺、一間ばかりづゝ上流の方が段々遠く、飛々に岩をかゞつたやうに隠見して、いづれも月光を浴びた、銀の鎧の姿、目のあたり近いのはゆるぎ糸を捌くが如く眞白に翻つて。

(結構な流れてございますな。)

(はい、此の水は源が瀧でございます、此山を旅するお方は皆な大風のやうな音を何處かで聞きます。貴僧は此方へ被入つしやる道でお心着きはなさいませんかい。)

然ればこそ山蛭の大藪へ入らうといふ少し前から其の音を。

(彼は林へ風の當るものではございませんで?)

(否、誰でも然う申します、那の森から三里ばかり傍道へ入りました處に大瀧があるのでござい

ます、其はく日本一ださうですが、路が峻しうござんすので、十人に一人参つたものはござい
ません。其の瀧が荒れましたと申しまして、丁度今から十三年前、可恐しい洪水がございました、
恸ましい處まで川の底になりましたね、麓の村も山も家も不残流れて了りました、此の上の洞も、
はじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、此の流れも其時から出来ました、御覽なさいましな、
此通り皆な石が流れたのでございませうよ。

婦人は何時かもう米を精げ果てて、衣紋の亂れた、乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を反して
立つた、鼻高く口を結んで目を恍惚と上を向いて頂を仰いだ、月はなほ半腹の其の累々たる巖
を照すばかり。

(今でも恠うやつて見ますと恐いやうでございませう。)と屈んで二の腕の處を洗つて居ると。

(あれ、貴僧、那樣行儀の可いことをして被在しつてはお召が濡れます、氣味が悪うございませ
うよ、すつぱり裸體になつてお洗ひなさいまし、私が流して上げませう。)

(否、)

(否ぢやあござんせぬ、それ、それ、お法衣の袖が浸るではありませんか。)といふと突然背後か
ら帯に手をかけて、身悶をして縮むのを、邪慳らしくすつぱり脱いで取つた。

私は師匠が嚴しかつたし、經を讀む身體ぢや、肌さへ脱いだことはつひぞ覺えぬ。然も婦人の

前、蝸牛が城を明け渡したやうで、口を利くさへ、況して手足のあがきも出来ず、背中を圓く
して、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を傍らの枝へふはりとかけた。

(お召は恠うやつて置きませう、さあお背を、あれさ、ぢつとして。お嬢様と仰有つて下さいま
したお禮に、叔母さんが世話を焼くのでござんす、お人の悪い.)といつて片袖を前齒で引上げ、
玉のやうな二の腕をあからさまに背中に乗せたが、熟と見て、

(まあ、)

(何うかいたしてをりますか。)

(痣のやうになつて、一面に。)

(え、それとございます、酷い目に逢ひました。)

思ひ出しても悚然とするて。)

十五

「婦人は驚いた顔をして、

(それでは森の中で、大變でございませうこと。旅をする人が、飛驒の山では蛭が降るといふのは
彼處でござんす。貴僧は拔道を御存じないから正面に蛭の巢をお通りなさいましたのでございま

すよ。お生命も冥加な位、馬でも牛でも吸ひ殺すのでございますもの。然し疼くやうにお痒いの
でござんせうね。

(唯今では最う痛みますばかりになりました。)

(それでは恚麼ものでござりましては柔かいお肌が擦剥けませう。)といふと手が綿のやうに障つ
た。

それから兩方の肩から、背、横腹、臀、さらさら水をかけてはさすつてくれる。

それがさ、骨に通つて冷たいかといふと然うではなかつた。暑い時分ぢやが、理窟をいふと恚
うではあるまい、私の血が沸いたせるか、婦人の温氣か、手で洗つてくれる水が可い工合に身に
染みる、尤も質の佳い水は柔かぢやさうな。

其の心地の得もいはれなさで、眠氣がさしたでもあるまいが、うとくする様子で、疵の痛み
がなくなつて氣が遠くなつて、ひたと附ついて居る婦人の身體で、私は花びらの中へ包まれたや
うな工合。

山家の者には肖合はぬ、都にも希な器量はいふに及ばぬが弱々しさうな風采ぢや、背中を流す
中にもはツツと内證で呼吸がはずむから、最も斷らうと思ひながら、例の恍惚で、氣はつ
きながら洗はした。

其上、山の氣か、女の香か、ほんのりと佳い薰がする、私は背後でつく息ぢやらうと思つた。
上人は一寸句切つて、

「いや、お前様お手近ぢや、其の明を掻き立つて貰ひたい、暗いと怪しからぬ話ぢや、此處等か
ら一番野面で遣つけよう。」

枕を並べた上人の姿も臙げに明は暗くなつて居た、早速燈心を明くすると、上人は微笑みなが
ら續けたのである。

「さあ、然うやつて何時の間にやら現とも無しに、恚う、其の不思議な、結構な薰のする暖い花
の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被つたから吃驚、石に尻
餅を搗いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思ふ途端に、女の手が背後から肩越しに胸を
おさへたので確りつかまつた。

(貴僧、お傍に居て汗臭うはござんせぬかい、飛んだ暑がりなんでございますから、恚うやつて
居りましても恚麼でございますよ。)といふ胸にある手を取つたのを、慌てて放して棒のやうに立
つた。

(失禮)

(いゝえ誰も見て居りはしませんよ。)と澄して言ふ、婦人も何時の間にか衣服を脱いで全身を練

絹のやうに露して居たのぢや。

何と驚くまいことか。

(恚癡に太つて居りますから、最うお可愧しいほど暑いのでございます、今時は毎日二度も三度も來ては恚うやつて汗を流します、此の水がございませんかつたら何ういたしませう、貴僧、お手拭。)といつて絞つたのを寄越した。

(其でおみ足をお拭きなさいまし。)

何時の間にか、體はちやんと拭いてあつた、お話し申すも恐多いが、は、は、は、)

十六

「なるほど見た處、衣服を着た時の姿とは違つて肉つきの豊かな、ふつくりとした膚。

(先刻小屋へ入つて世話をしましたので、ぬら／＼した馬の鼻息が體中へかゝつて氣味が悪うござんす。丁度可うございますから私も體を拭きませう。)

と姉弟が内端話をするやうな調子。手をあげて黒髪をおさへながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを兩手で絞りながら立つた姿、唯これ雪のやうなのを恚る靈水で清めた、恚う云ふ女の汗は薄紅になつて流れよう。

一寸々と櫛を入れて、

(まあ、女がこんなお轉婆をいたしまして、川へ落こちたら何うしませう、川下へ流れて出ましたら、村里の者が何といつて見ませうね。)

(白桃の花だと思ひます。)と弗と心付いて何の氣もなしにいふと、顔が合うた。

すると、然も嬉しさうに莞爾して其時だけは初々しう年紀も七ツ八ツ若やぐばかり、處女の羞を含んで下を向いた。

私は其ま、目を外らしたが、其の一段の婦人の姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら向う岸の激に濡れて黒い、滑かな大きな石へ蒼味を帯びて透通つて映るやうに見えた。

するとね、夜目で判然とは目に入らなんだが地體何でも洞穴があると見える。ひら／＼と、此方からもひら／＼と、ものの鳥ほどはあらうといふ大蝙蝠が目を遮つた。

(あれ、不可いよ、お客様があるぢやないかね。)

不意を打たれたやうに叫んで身悶えをしたのは婦人。

(何うかなさいましたか)最うちやんと法衣を着たから氣丈夫に尋ねる。

(否、)

といつたばかりで極が悪さうに、くるりと後向になつた。

其時小犬ほどな鼠色の小坊主が、ちよこくとやつて来て、啊呀と思ふと、崖から横に宙をひよいと、背後から婦人の背中へびつたり。

裸體の立姿は腰から消えたやうになつて、抱ついたものがある。

(畜生、お客様が見えないかい。)

と聲に怒を帯びたが、

(お前達は生意氣だよ)と激しくいひさま、腋の下から覗かうとした件の動物の天窓を振返りさまにくらはしたで。

キツ、と、というて奇聲を放つた、件の小坊主は其ま、後飛びに又宙を飛んで、今まで法衣をかけて置いた、枝の尖へ長い手で釣し下つたと思ふと、くるりと釣瓶覆に上へ乗つて、其なりさらさらと木登をしたのは、何と猿ぢやあるまいか。

枝から枝を傳ふと見えて、見上げるやうに高い木の、懸て梢まで、かさくがさり。

まばらに葉の中を透して月は山の端を放れた、其の梢のあたり。

婦人はものに拗ねたやう、今の悪戯、いや、毎々、臺と蝙蝠と、お猿で三度ぢや。

其の悪戯に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様には得てある圖や。

本當に怒り出す。

といつた風情で面倒臭さうに衣服を着て居たから、私は何にも問はずに小さくなつて黙つて控へた。

十七

「優しいなかに強みのある、氣輕に見えても何處にか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に應のあるといつたやうな風の婦人、恠く嬌瞋を發しては屹度可いことはあるまい、今此の婦人に邪慳にされては木から落ちた猿同然ぢやと、おつかなびつくりで、おづく控へて居たが、いや案するより産が安い。

(貴僧、嗚をかしかつたでござんせうね)と自分でも思ひ出したやうに快く微笑みながら、

(無やうがないのでございますよ。)

以前と變らず心安くなつた、帯も早やしめたので、

(其では家へ歸りませう)と米磨桶を小腋にして、草履を引かけて衝と崖へ上つた。

(お危うござんすから。)

すつと心得た意ぢやつたが、扱上る時見ると思ひの外上までは大層高い。
躰て又例の木の丸太を渡るのが、先刻もいつた通り草のなかに横倒れになつて居る木地が
憊う丁度鱗のやうで、譬にも能くいふが松の木は蝮に似て居るで。

殊に崖を、上の方へ、可い鹽梅に蛻つた様子が、飛んだものに持つて来いなり、凡そ此の位な
洞中の長蟲がと思ふと、頭と尾を草に隠して、月あかりに歴然とそれ。

山路の時を思ひ出すと我ながら足が竦む。
婦人は深切に後を氣遣うては氣を付けてくれる。

(其をお渡りなさいませす時、下を見てはなりません、丁度ちうとで餘程谷が深いのでございませす
から、目が廻ふと悪うござんす。)

(はい。)
愚圖々々しては居られぬから、我身を笑ひつけて、先づ乗つた。引かゝるやう、刻が入れてあ
るのぢやから、氣さへ確なら足駄でも歩行かれる。

其がさ、一件ぢやから耐らぬて、乗ると憊うぐらくして柔かにするくくと這ひさうぢやから、
わつといふと引跨いで腰をどさり。
(あゝ、意氣地はございませんねえ。足駄では無理でございませう、是とお穿き換へなさいまし、

あれさ、ちやんといふことを肯くんですよ。)

私はその先刻から何んとなく此婦人に畏敬の念が生じて善か悪か、何の道命令されるやうに心
得たから、いはるゝまゝに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人は足駄を穿きながら手を取つてくれます。

忽ち身が軽くなつたやうに覺えて、譯なく後に従つて、ひよいと那の孤家の背戸の端へ出た。
出會頭に聲を懸けたものがある。

(やあ、大分手間が取れると思つたに、御坊様舊の體で歸らつしやつたの。)

(何をいふんだね、小父様家の番は何うおしだ。)

(もう可い時分ぢや、又私も餘り遅うなつては道が困るで、そろゝ青を引出して支度して置か
うと思つてよ。)

(其はお待遠でござんした。)

(何さ、行つて見さつしやい御亭主は無事ぢや、いやなかゝ私に手には口説落されなんだ、は
ゝはゝ。)と意味もないことを大笑して、親仁は廐の方へてくゝと行つた。

白癡はおなじ處に猶形を存して居る、海月も日にあたらねば解けぬと見える。」

「ヒイ、ン！ 叱、どうくくくと背戸を廻る鱒爪の音が縁へ響いて親仁は一頭の馬を門前へ引き出した。

轡頭を取つて立ちはだかり、

（嬢様そんなら此儘で私参りやる、はい、御坊様に澤山御馳走して上げなされ。）

婦人は爐縁に行燈を引附け、俯向いて鍋の下を燻して居たが、振仰ぎ、鐵の火箸を持つた手を膝に置いて、

（御苦勞でござんす。）

（いんえ御懇には及びましねえ。叱！）と荒繩の綱を引く。青で蘆毛、裸馬で逞しいが、鬣の薄い牡ぢやわい。

其馬がさ、私も別に馬は珍しうもないが、白癡殿の背後に畏つて手持不沙汰ぢやから今引いて行かうとする時縁側へひらりと出て、

（其馬は何處へ。）

（お、諏訪の湖の邊まで馬市へ出しやすのぢや、これから明朝御坊様が歩行かつしやる山路を

越えて行きやす。）

（もし、其へ乗つて今からお遁げ遊ばすお意ではないかい。）
婦人は慌だしく遮つて聲を懸けた。

（いえ、勿體ない、修行の身が馬で足休めをしませうなぞとは存じませぬ。）

（何でも人間を乗つけられさうな馬ぢやあござらぬ。御坊様は命拾ひをなされたのぢやで、大人しうして嬢様の袖の中で、今夜は助けて貰はつしやい。然様ならちよつくら行つて参りますよ。）
（あい。）

（畜生。）といったが馬は出ないわ。びくくくと蠢いて見える大な鼻面を此方へ捻ぢや向けて頻に私等が居る方を見る様子。

（どうくくどう、畜生これあだけた獣ぢや、やい！）

右左にして綱を引張つたが、脚から根をつけた如くにぬつくと立つて居てびくともせぬ。親仁大いに苛立つて、叩いたり、打つたり、馬の胴體について二三度ぐるぐると廻つたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるやうにして横腹へ體をあてた時、漸う前足を上げたばかり又四脚を突

張り抜く。
（嬢様々々。）

と親仁が喚くと、婦人は一寸立つて白い爪さきをちよろ／＼と眞黒に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の届かぬほどに小隠れた。

其内腰に挟んだ、煮染めたやうな、なえ／＼の手拭を抜いて克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁は之で可しといふ氣組、再び前へ廻つたが、舊に依つて貧乏動もしないので、綱に兩手をかけて足を揃へて返返るやうにして、うむと總身に力を入れた。途端に何うぢやい。凄じく嘶いて前足を兩方中空へ翻したから、小さな親仁は仰向けに引くりかへつた、づどんと、月夜に砂煙が燦と立つ。

白癡にも之は可笑しかつたらう、此時ばかりぢや、眞直に首を据ゑて厚い唇をばくりと開けた、大粒な齒を露出して、那の宙へ下げて居る手を風で煽るやうに、はらり／＼。

(世話が焼けることねえ、)

婦人は投げるやうにいつて草履を突かけて土間へついで出る。

(嬢様勘違ひさつしやるな、これはお前様ではないぞ、何でもはじめから其處な御坊様に目をつけたつけよ、畜生俗縁があるだッぺいわさ。)

俗縁は驚いたい。

すると婦人が、

(貴僧、へ入らつしやる路で誰にかお逢ひなさりはしませんか。)

十九

(はい、辻の手前で富山の反魂丹賣に逢ひましたが、一足先に矢張此路へ入りました。)

(あ、然う)と會心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、凡そ耐らなく可笑しいといつたはしたない風采で。

極めて興し易う見えたので、

(もしや此家へ参りませなんだでございませうか。)

(否、存じません)といふ時忽ち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を拂うて居る馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

(爲様がないねえ)といひながら、かなぐるやうにして、其の細帯を解きかけた、片端が土へ引かうとするのを、搔取つて一寸猶豫ふ。

(あ、あ)と濁つた聲を出して白癡が件のひよろりとした手を差向けたので、婦人は解いたのを渡して遣ると、風呂敷を寛げたやうな、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて寶物を守護するやうぢや。

の傍へ其の便々たる腹を持つて來たが、崩れたやうに胡坐して、頻に慙う我が膳を視めて、指をした。

(うゝゝ、うゝゝ。)

(何でございますね、あとでお食んなさい、お客様ぢやありませんか。)

白癡は情ない顔をして口を曲めながら頭を掉つた。

(厭？ 仕様がありませんね、それぢや御一所に召しあがれ。貴僧、御免を蒙りますよ。)

私は思はず箸を置いて、

(さあ何うぞお構ひなく、飛んだ御雑作を頂きます。)

(否、何の貴僧。お前さん後程に私と一所にお食べなされば可いのに。困つた人でございますよ。)

とそらさぬ愛想、手早く同一やうな膳を拵へてならべて出した。

飯のつけやうも效々しい女房ぶり、然も何となく奥床しい、上品な、高家の風がある。

白癡はどんよりした目をあげて膳の上を睨めて居たが、

(彼を、あゝ、彼、彼。)

といつてきよろゝと四邊を眊す。

婦人は黙と瞻つて、

(まあ、可いぢやないか。そんなものは何時でも食られます、今夜はお客様がありますよ。)

(うむ、いや、いや。)

と肩腹を揺つたが、べそを搔いて泣出しさう。

婦人は困じ果てたらしい、傍のものの氣の毒さ。

(嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたが可いではござりませんか。私にお氣遣は却つて心苦しうござります。)

と慇懃にいうた。

婦人は又最う一度、

(厭かい、これでは悪いのかい。)

白癡が泣出しさうになると、然も怨めしげに流眊に見ながら、こはれゝゝになつた戸棚の中か

ら、鉢に入つたのを取り出して手早く白癡の膳につけた。

(はい。)

と故とらしく、すねたやうにいつて笑顔造。

はてさて迷惑な、こりや目の前で黄色蛇の旨煮か、腹籠の猿の蒸焼か、災難が輕うても、赤蛙

の干物を大口にしやぶるであらうと、潛と見て居ると、片手に椀を持ちながら擱出したのは老澤

庵。

其もさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたらうといふ握太なのを横銜へにしてやらかす

のぢや。

婦人はよくゝあしらひかねたか、盗むやうに私を見て颯と顔を赧らめて初心らしい、然様な

質ではあるまいに、羞かしげに膝なる手拭の端を口にあてた。

なるほど此の少年はこれであらう、身體は澤庵色にふとつて居る。やがてわけもなく餌食を平らげて湯ともいはず、ふツ／＼と大儀さうに呼吸を向うへ吐くわさ。

(何でございますか、私は胸に支へましたやうで、些少も欲しくございませぬから、又後程に頂きませう。)

と婦人自分は箸も取らずに二ツの膳を片づけてな。

二十一

「頃刻悄乎して居たつけ。

(貴僧、嗚お疲勞、直にお休ませ申しませうか。)

(難有う存じます、未だ些とも眠くはござりませぬ、先刻體を洗ひましたので草臥もすつかり復りました。)

(那の流れは甚麼病にでもよく利きます、私が苦勞をいたしましたして骨と皮ばかりに體が朽れましても、半日彼處につかつて居りますと、水々しくなるのでございませぬ。尤も那のこれから冬になりまして山が宛然氷つて了ひ、川も岨も不殘雪になりまして、貴僧が行水を遊ばした彼處は

かりは水が隠れませぬ、然うしていきりが立ちます。

鐵砲疵のございます猿だの、貴僧、足を折つた五位驚、種々なものが浴みに參りますから其の足跡で岨の路が出来ます位、屹と其が利いたのでございませう。

那樣にございませぬければ、恚うやつてお話をなすつて下さいまし、寂しくつてなりません、本當にお可愧しうございませぬ、恚麼山の中に引籠つてをりますと、ものをいふことも忘れませんでした、やうで、心細いのでございませぬ。

貴僧、それでもお眠ければ御遠慮なさいませぬ。別にお寢室と申してもございませぬが其代り蚊は一ツも居ませぬよ、町方ではね、上の洞の者は、里へ泊りに來た時蚊帳を釣つて寝かさうとすると、何うして入るのか解らないので、梯子を貸せいと喚いたと申して、駈るのでございませぬ。澤山朝寐を遊ばしても鐘は聞えず、鶏も鳴きませぬ、犬だつて居りませぬから安心うございませぬ。

此人も生れ落ちると此山で育つたので、何にも存じませぬ代り、氣の可い人で些ともお心置はないのでございませぬ。

それでも風俗のかはつた方が被入しやいますと、大事にしてお辭儀をすることだけは知つてでございませぬ、未だ御挨拶をいたしませんね。此頃は體がだるいと見えてお情けさんになんす

つたよ。否、宛で愚なわけではございません、何でもちやんと心得て居ります。

さあ、御坊様に御挨拶をなすつて下さい。まあ、お辭儀をお忘れかい。と親しげに身を寄せて、顔を差し覗いて、いそ／＼していふと、白癡はふら／＼と両手をついて、ぜんまいが切れたやうにながつくり一禮。

(はい)といつて私も何か胸が迫つて頭を下げた。

其ま、其の俯向いた拍子に筋が抜けたらしい、横に流れようとするのを、婦人は優しく扶け起して、

(お、よく爲たのねえ、)

天晴といひたさうな顔色で、

(貴僧、申せば何でも出来ませうと思ひますけれども、此人の病ばかりはお醫者の手でも那の水でも復りませなんだ、兩足が立ちませぬのでございますから、何を覚えさしましても役には立ちません。其に御覽なさいまし、お辭儀一ツいたしますさへ、あの通り大儀らしい。

ものを教へますと覺えますのに、喉骨が折れて切なうござんせう、體を苦しませるだけだと存じて何にも爲せないで置きますから、段々、手を動かす働も、ものをいふことも忘れしました。其でも那の、謠が唄へますわ。二ツ三ツ今でも知つて居りますよ。さあ御客様に一ツお聞かせなさい

ましなね。)

白癡は婦人を見て、又私が顔をじろ／＼見て、人見知をするといった形で首を振つた。

二十二

「左右して、婦人が、勵ますやうに、賺すやうにして勸めると、白癡は首を曲げて彼の臍を弄びながら唄つた。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、

拾遣りたや足袋添へて。

(よく知つて居りませう)と婦人は聞き澄して莞爾する。

不思議や、唄つた時の白癡の聲は此話をお聞きなさるお前様は固よりぢやが、私も推量したとは月籠雲泥、天地の相違、節廻し、あげさげ、呼吸の續く處から、第一其の清らかな涼しい聲といふ者は、到底此の少年の咽喉から出たものではない。先づ前の世の此白癡の身が、冥土から管で其のふくれた腹へ通はして寄越すほどに聞きましたよ。

私は畏つて聞き果てると、膝に手をついたツ切り何うしても顔を上げて其處な男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤ／＼して、はら／＼と落涙した。

婦人は目早く見つけたさうで、

(おや、貴僧、何うかなさいましたか。)

急にもものいはれなんだが漸々、

(唯、何、變つたことでもござりませぬ、私も嬢様のことは別にお尋ね申しませんから、貴女も何にも問うては下さりませぬ。)

と仔細は語らず唯思ひ入つて然う言うたが、實は以前から様子でも知れる、金釵玉簪をかざし、蝶衣を纏うて、珠履を穿たば、正に驪山に入つて、相抱くべき豊肥妖艶の人が、其男に對する取廻しの優しさ、隔なさ、深切さに、人事ながら嬉しくて、思はず涙が流れたのぢや。

すると人の腹の中を讀みかねるやうな婦人ではない、忽ち様子を悟つたかして、

(貴僧は眞個にお優しい。)といつて、得も謂はれぬ色を目に湛へて、ちつと見た。私も首を低れた、むかうでも差俯向く。

いや、行燈が又薄暗くなつて參つたやうぢやが、恐らくこりや白癡の所爲ぢやて。

其時よ。

座が白けて、暫く言葉が途絶えたちちに所在がないので、唄うたひの太夫、退屈をしたと見えて、顔の前の行燈を吸ひ込むやうな大欠伸をしたから。

身動きをしてな、

(寢ようちやあ、寢ようちやあ。)とよたく、體を保持ふわい。

(眠うなつたのかい、もうお寢か。)といつたが坐り直つて弗と氣がついたやうに四邊を向した。戶外は恰も眞晝のやう、月の光は開け擴げた家の内へはらくとさして、紫陽花の色も鮮麗に蒼かつた。

(貴僧ももうお休みなさいですか。)

(はい、御厄介にあひなりまする。)

(まあ、いま宿を寢かします、おゆつくりなさいましな。戶外へは近うござんすが、夏は廣い方が結句宜うございませう、私どもは納戸へ臥せりますから、貴僧は此處へお廣くお寛ぎが可うござんす、一寸待つて。)といひかけて衝と立ち、つかくと足早に土間へ下りた、餘り身のこなし

が活潑であつたので、其の拍子に黒髪が先を巻いたま、項へ崩れた。

鬢をおさへて戸につかまつて、戶外を透したが、獨言をした。

(おやくさつきの騒ぎで櫛を落したさうな。)

いかさま馬の腹を潛つた時ぢや。)

此折から下の廊下に聲音がして、靜に大跨に歩いたのが、寂として居るから能く。廳て小用を達した様子、雨戸をばたりと開けるのが聞えた、手水鉢へ柄杓の響。

(お、積つた、積つた。)と呟いたのは、旅籠屋の亭主の聲である。

(ほ、う、此の若狭の商人は何處へか泊つたと見える、何か愉快い夢でも見て居るかな。)

(何うぞ其後を、それから。)と聞く身には他事をいふうちが抵悟しく、膠もなく續きを促した。

(さて、夜も更けました。)といつて旅僧は又語出した。

「大抵推量もなさるであらうが、いかに草臥れて居つても申上げたやうな深山の孤家で、眠られるものではない、其に少し氣になつて、はじめの内私を寝かさなかつた事もあるし、目は冴えて、まじくして居たが、有繫に、疲が酷いから、心は少し茫乎して來た、何しろ夜の白むのが待遠でならぬ。

其處ではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼みにして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり経つたものをと、怪しんだが、やがて氣が付いて、慙云ふ處ぢや山寺處ではないと思ふと、俄に心細くなつた。

其時は早や、夜がものに譬へると谷の底ぢや、白癡がだらしのない寐息も聞えなくなると、忽ち戸の外にももの氣勢がして來た。

獸の蹙音のやうで、然まで遠くの方から歩いて來たのではないやう、猿も、麤も、居る處と、氣休めに先づ考へたが、なか／＼何うして。

暫くすると今其奴が正面の戸に近いたなと思つたのが、羊の鳴聲になる。

私は其の方を枕にして居たのぢやから、つまり枕頭の戶外ぢやな。暫くすると、右手の彼の紫陽花が咲いて居た其の花の下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むさ、びか知らぬがきツ／＼といつて屋の棟へ、廳て凡そ小山ほどあらうと氣取られるのが胸を壓すほどに近いて來て、牛が鳴いた、遠くの彼方からひた／＼と小刻に駈けて來るのは、二本足に草鞋を穿いた獸と思はれた、いやさま／＼にむらく／＼と家のぐるりを取巻いたやうで、三十のもの鼻息、羽音、中には囁いて居るのがある。恰も何よ、それ畜生道の地獄の繪を、月夜に映したやうな怪しの姿が板戸一重、魑魅魍魎といふのであらうか、ざわ／＼と木の葉が戦ぐ氣色だつた。

息を凝すと、納戸で、

(うむ)といつて長く呼吸を引いて一聲、魔れたのは婦人ぢや。

(今夜はお客様があるよ。)と叫んだ。
(お客様があるぢやないか。)

と暫く経つて二度目の判然と清しい聲。

極めて低聲で、

(お客様があるよ。)といつて寢返る音がした、更に寢返る音がした。

戸の外のものゝの氣勢は動搖を造るが如く、ぐらくと家が揺れた。

私は陀羅尼を呪した。

若不順我呪

惱亂說法者

頭破作七分

如阿梨樹枝

如殺父母罪

亦如厭油殃

斗秤欺誰人

調達僧罪犯

犯此法師者

當獲如是殃

と一心不亂、颯と木の葉を捲いて風が南へ吹いたが、忽ち静り返つた、夫婦が聞もひっそりした。

二十四

「翌日又正午頃、里近く、瀧のある處で、昨日馬を賣りに行つた親仁の歸りに逢うた。丁度私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送らうと思つて居た處で。

實を申すと此處へ来る途中でも其の事ばかり考へる、蛇の橋も幸になし、蛭の林もなかつたが、道が難澁なにつけても、汗が流れて心持が悪いにつけても、今更行脚も詰らない。紫の袈裟をかけて、七堂伽藍に住んだ處で何程のこともあるまい、活佛様ぢやというて、わあゝ拜まれれば人いさで胸が悪くなるばかりか。

些とお話もいかぢやから、先刻はことを分けていひませなんだが、昨夜も白癡を寐かしつけると、婦人が又爐のある處へやつて来て、世の中へ苦勞をしに出ようより、夏は涼しく、冬は暖かい、此の流に一所に私の傍においでなさいといつてくれるし、まだく其ばかりでは自分に魔が魅したやうぢやけれど、こゝに我身で我身に言譯が出来るといふのは、頻りに婦人が不便でならぬ、深山の孤家に白癡の伽をして言葉も通せず、日を経るに従うてものをいふことさへ忘れるやうな氣がするといふは何たる事!

殊に今朝も東雲に袂を振り切つて別れようとする、お名残惜しや、かやうな處に慙うやつて老朽ちる身の、再びお目にはかゝられまい、いさゝ小川の水になりとも、何處ぞで白桃の花が流

れるのを御覽になつたら、私の體が谷川に沈んで、ちぎれ／＼になつたことと思へ、といつて悄
れながら、なほ深切に、道は唯此の谷川の流に沿うて行きさへすれば、何れほど遠くても里に
出らるゝ、目の下近く水が躍つて、瀧になつて落つるのを見たら、人家が近づいたと心を安んず
るやうに、と氣をつけて、孤家の見えなくなつた邊で、指しをしてくれた。

其手と手を取交すには及ばずとも、傍につき添つて、朝夕の話對手、葦の汁で御膳を食べたり、
私が櫓を焚いて、婦人が鍋をかけて、私が木の實を拾つて、婦人が皮を剥いて、それから障子の
内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川で二人して、其時の婦人が裸體になつて私が背
中へ呼吸が通つて、微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、其まゝ命が失せても可い！

瀧の水を見るにつけても耐へ難いのは其事であつた、いや、冷汗が流れます。
其上、もう氣がたるみ、筋が弛んで、早や歩行くのに飽きが来て、喜ばねばならぬ人家が近づ
いたのも、高がよくされて口の臭い婆さんに澁茶を振舞はれるのが關の山と、里へ入るのも厭に
なつたから、石の上へ膝を懸けた、丁度目の下にある瀧ぢやつた、これがさ、後に聞くと女夫瀧
と言ふさうで。

真中に先づ鰐鮫が口をあいたやうな先のとがつかつた黒い大巖が突出て居ると、上から流れて来る
颯と瀨の早い谷川が、之に當つて兩に岐れて、凡そ四丈ばかりの瀧になつて哄と落ちて、又暗碧
に白布を織つて矢を射るやうに里へ出るのぢやが、其巖にせかれた方は六尺ばかり、之は川の一
幅を裂いて絲も亂れず、一方は幅が狭い、三尺位、この下には雑多な岩が竝ぶと見えて、ちらち
らちら／＼と玉の簾を百千に砕いたやう、件の鰐鮫の巖に、すれつ、縫れつ。」

二十五

「唯一筋でも巖を越して男瀧に縋りつかうとする形、それでも中を隔てられて末までは雫も通は
ぬので、揉まれ、揺られて具さに辛苦を嘗めるといふ風情、此の方は姿も窈窕も容も細つて、流る
る音さへ別様に、泣くか、怨むかとも思はれるが、あはれにも優しい女瀧ぢや。
男瀧の方はうらはらで、石を碎き、地を貫く勢、堂々たる有様ぢや、之が二つ件の巖に當つ
て左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸みて、女瀧の心を碎く姿は、男の膝に取つて美
女が泣いて身を震はすやうで、岸に居てさへ體がわな／＼、肉が跳る。況して此の水は、昨日
孤家の婦人と水を浴びた處と思ふと、氣の所爲か其の女瀧の中に繪のやうな彼の婦人の姿が歴々、
と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思ふと又浮いて、千筋に亂るゝ水とともに其の膚が粉に碎
けて、花片が散込むやうな。あなやと思ふと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足も全き姿とな
つて、浮いつ沈みつ、はつと刻まれ、あつと見る間に又あらはれる。私は耐らず眞逆に瀧の中へ

飛込んで、女瀧を確と抱いたとまで思つた。気がつくとも男瀧の方はどう〜と地響打たせて。山彦を呼んで轟いて流れて居る、あ、其の力を以て何故救はぬ、儘よ！

瀧に身を投げて死なうより、舊の孤家へ引返せ。汚ららしい欲のあればこそ憐うなつた上に躊躇するわ、其顔を見て聲を聞けば、渠等夫婦が同衾するのに枕を並べて差支へぬ、それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりは餘程の増ぢやと、思切つて戻らうとして、石を放れて身を起した、背後から一ツ背中を叩いて、

（やあ、御坊様。）といはれたから、時が時なり、心も心、後暗いので喫驚して見ると、閻王の使ではない、これが親仁。

馬は賣つたか、身軽になつて、小さな包みを肩にかけて、手に一尾の鯉の、鱗は金色なる、潑刺として尾の動きさうな、鮮しい、其丈三尺ばかりなのを、頭に葉を通して、ぶらりと提げて居た。何んにも言はず急にもいはいはれないで瞻ると、親仁はぢつと顔を見たよ。然うしてにやにやと、又一通りの笑ひ方ではないて、薄氣味の悪い北叟笑をして、

（何をしてござる、御修行の身が、この位の暑で、岸に休んで居さつしやる分ではあんめえ、一生懸命に歩行かつしやりや、昨夜の泊から此處まではたつた五里、もう里へ行つて地藏様を拜まつしやる時刻ぢや。

何ぢやの、己が嬢様に念が懸つて煩惱が起きたのぢやの。うんにや、祕さつしやるな、おらが目は赤くツツても、白いか黒いかはちやんと見える。

地體並のものならば、嬢様の手が觸つて那の水を振舞はれて、今まで人間で居よう筈はない。牛か馬か、猿か、豪か、蝙蝠か、何にせい飛んだか跳ねたかせねばならぬ。谷川から上つて來さした時、手足も顔も人ぢやから、おらあ魂消た位、お前様それでも感心に志が堅固ぢやから助かつたやうなものよ。

何と、おらが曳いて行つた馬を見さしたらう、それで、孤家へ來さつしやる山路で富山の反魂丹賣に逢はしたといふではないか、それ見さつせい、彼の助平野郎、疾に馬になつて、それ馬市で錢になつて、お錢が、そうら此の鯉に化けた。大好物で晩飯の菜になさる、お嬢様を一體何ぢやと思はつしやるの。」

私は思はず遮つた。
「お上人？」

上人は頷きながら呟いて、

「いや、先づ聞かつしやい、彼の孤家の婦人といふは、舊な、これも私には何かの縁があつた、あの恐しい魔處へ入らうといふ岐道の水が溢れた往來で、百姓が教へて、彼處は其の以前醫者の家であつたというたが、其の家の嬢様ぢや。

何でも飛驒一圓當時變つたことも珍らしいこともなかつたが、唯取り出でていふ不思議は此の醫者の娘で、生れると玉のやう。

母親殿は頬板のふくれた、眈の下つた、鼻の低い、俗にさし乳といふあの毒々しい左右の胸の房を含んで、何うして彼ほど美しく育つたものだらうといふ。

昔から物語の本にもある、屋の棟へ白羽の征矢が立つか、然もなければ狩倉の時貴人のお目に留つて御殿に召出されるのは、那麼のぢやと噂が高かつた。

父親の醫者といふのは、頬骨ののがつた髻の生えた、見得坊で傲慢、其癖でもぢや、勿論田舎には刈入の時よく稻の穂が目に入ると、それから煩ふ、脂目、赤目、流行目が多いから、先生眼病の方は少し遣つたが、内科と來てはからツペた。外科なんと來た日にやあ、鬢附へ水を垂らし、てひやりと疵につける位な處。

鯛の天窓も信心から、其でも命數の盡きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木齋の居ない土地、相應に繁昌した。

殊に娘が十六七、女盛となつて來た時分には、藥師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたといつて、信心渴仰の善男善女？ 病男病女が我も〜と詰め懸ける。

其といふのが、はじめは彼の嬢様が、それ、馴染の病人には毎日顔を合せるところから愛想の一つも、あなたお手が痛みますか、甚麼でございます、といつて手先へ柔かな掌が障ると第一番に次作兄といふ若いもの（りやうまちす）が全快、お苦しうなといつて腹をさすつて遣ると水あたりの差込の留まつたのがある、初手は若い男ばかりに利いたが、段々老人にも及ぼして、後には婦人の病人もこれで復る、復らぬまでも苦痛が薄らぐ、根太の膿を切つて出すさへ、錆びた小刀で引裂く醫者殿が腕前ぢや、病人は七顛八倒して悲鳴を上げるのが、嬢が來て背中へぴつたりと胸をあてて肩を押へて居ると、我慢が出来るといつたやうなわけであつたさうな。

一時彼の藪の前にある枇杷の古木へ熊蜂が來て可恐しい大きな巢をかけた。

すると醫者の内弟子で藥局、拭掃除もすれば總菜畠の芋も掘る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯の熊藏といふ、其頃二十四五歳、稀鹽散に單舍利別を混ぜたのを瓶に盗んで、内が吝嗇ぢやから見附かると叱られる、之を股引や袴と一所に戸棚の上に載せて置いて、隙さへあればちびりちびり飯んでた男が、庭掃除をするといつて、件の蜂の巢を見つけたつけ。

縁側へ遣つて來て、お嬢様面白いことをしてお目に懸けませう、無羨でござりますが、私の此

「いや、先づ聞かつしやい、彼の孤家の婦人といふは、舊な、これも私には何かの縁があつた、あの恐しい魔處へ入らうといふ岐道の水が溢れた往來で、百姓が教へて、彼處は其の以前醫者の家であつたというたが、其の家の嬢様ぢや。

何でも飛驒一圓當時變つたことも珍らしいこともなかつたが、唯取り出でていふ不思議は此の醫者の娘で、生れると玉のやう。

母親殿は頬板のふくれた、眈の下つた、鼻の低い、俗にさし乳といふあの毒々しい左右の胸の房を含んで、何うして彼ほど美しく育つたものだらうといふ。

昔から物語の本にもある、屋の棟へ白羽の征矢が立つか、然もなければ狩倉の時貴人のお目に留つて御殿に召出されるのは、那麼のぢやと噂が高かつた。

父親の醫者といふのは、頬骨ののがつた髻の生えた、見得坊で傲慢、其癖でもぢや、勿論田舎には刈入の時よく稻の穂が目に入ると、それから煩ふ、脂目、赤目、流行目が多いから、先生眼病の方は少し遣つたが、内科と來てはからツペた。外科なんと來た日にやあ、鬢附へ水を垂らし、てひやりと疵につける位な處。

鯛の天窓も信心から、其でも命數の盡きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木齋の居ない土地、相應に繁昌した。

殊に娘が十六七、女盛となつて來た時分には、藥師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたといつて、信心渴仰の善男善女？ 病男病女が我も〜と詰め懸ける。

其といふのが、はじめは彼の嬢様が、それ、馴染の病人には毎日顔を合せるところから愛想の一つも、あなたお手が痛みますか、甚麼でございます、といつて手先へ柔かな掌が障ると第一番に次作兄といふ若いもの（りやうまちす）が全快、お苦しうなといつて腹をさすつて遣ると水あたりの差込の留まつたのがある、初手は若い男ばかりに利いたが、段々老人にも及ぼして、後には婦人の病人もこれで復る、復らぬまでも苦痛が薄らぐ、根太の膿を切つて出すさへ、錆びた小刀で引裂く醫者殿が腕前ぢや、病人は七顛八倒して悲鳴を上げるのが、嬢が來て背中へぴつたりと胸をあてて肩を押へて居ると、我慢が出来るといつたやうなわけであつたさうな。

一時彼の藪の前にある枇杷の古木へ熊蜂が來て可恐しい大きな巢をかけた。

すると醫者の内弟子で藥局、拭掃除もすれば總菜畠の芋も掘る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯の熊藏といふ、其頃二十四五歳、稀鹽散に單舍利別を混ぜたのを瓶に盗んで、内が吝嗇ぢやから見附かると叱られる、之を股引や袴と一所に戸棚の上に載せて置いて、隙さへあればちびりちびり飯んでた男が、庭掃除をするといつて、件の蜂の巢を見つけたつけ。

縁側へ遣つて來て、お嬢様面白いことをしてお目に懸けませう、無羨でござりますが、私の此

の手を握つて下さりますと、彼の蜂の中へ突込んで、蜂を掴んで見せませう。お手が障つた所だけは螫しましても痛みませぬ、竹箒で引拂いては八方へ散らばつて體中に集られては夫は凌げませぬ即死でございますがと、微笑んで控へる手で無理に握つて貰ひ、つか／＼と行くと、凄じい蟲の唸、聽て取つて返した左の手に熊蜂が七ツ八ツ、羽ばたきをするのがある、脚を振ふのがあつた、中には掴んだ指の股へ這出して居るのがあつた。

さあ、那の神様の手が障れば鐵砲玉でも通るまいと、蜘蛛の巣のやうに評判が八方へ。

其の頃からいつとなく感得したものと見えて、仔細あつて、那の白癩に身を任せて山に籠つてからは神變不思議、年を経るに従つて神通自在ぢや、はじめは體を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果は間を隔て居ても、道を迷つた旅人は嬢様が思ふまゝ、はツといふ呼吸で變ずるわ。

と親仁が其時物語つて、御坊は、孤家の周囲で、猿を見たらう、麤を見たらう、蝙蝠を見たであらう、兎も蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩!

あはれ其時那の婦人が、臺に絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸はれたのも、夜中に魘魅魘魘に魔はれたのも、思ひ出して、私は袴々と胸に當つた。

なほ親仁のいふやう。

今の白癩も、件の評判の高かつた頃、醫者の内へ来た病人、其頃は未だ子供、朴訥な父親が附添ひ、髪が長い、兄貴がおぶつて山から出て来た。脚に難澁な腫物があつた、其の療治を頼んだので。

固より一室を借受けて、逗留をして居つたが、かほどの惱は大事ぢや、血も大分に出さねばならぬ、殊に子供、手を下すには體に精分をつけてからと、先づ一日に三ツづ、鶏卵を飲まして、氣休めに膏藥を貼つて置く。

其の膏藥を剥がすにも親や兄、又傍のものが手を懸けると、堅くなつて硬ばつたのが、めりめりと肉にくツついて取れる、ひい／＼と泣くのぢやが、娘が手をかけてやれば黙つて耐へた。

一體は醫者殿、手のつけやうがなくなつて身の衰をいひ立てに一日延ばしにしたのぢやが三日経つと、兄を残して、克明な父親は股引の膝ですつて、あとさがりに玄關から土間へ、草鞋を穿いて又地に手をついて、次男坊の生命の扶かりまするやうに、ねえ／＼、とて山へ歸つた。

其でもなか／＼抄取らず、七日も経つたので、後に残つて附添つて居た兄者人が、丁度刈入で、此節は手が八本も欲しいほど忙しい、お天氣模様も雨のやう、長雨にでもなりますと、山島にかけがへのない、稻が腐つては、餓死でござりまする、總領の私は、一番の働手、かうしては居られませぬから、と辭をいつて、やれ泣くでねえぞ、としんみり子供にいひ聞かせて病人を置いて

行つた。

後には子供一人、其時が、戸長様の帳面前年六ツ、親六十で兒が二十なら徴兵はお目こぼしと何を間違へたか届が五年遅うして本當は十一、それでも奥山で育つたから村の言葉も碌には知らぬが、伶俐な生れで聞分があるから、三ツづ、あひかはらず鶏卵を吸はせられる汁も、今に療治の時残らず血になつて出ることと推量して、べそを搔いても、兄者が泣くなといはしつたと、耐へて居た心の内。

娘の情で内と一所に膳を竝べて食事をさせると、澤庵の切をくはへて隅の方へ引込むいぢらしさ。

彌よ明日が手術といふ夜は、皆寐靜まつてから、しくしく蚊のやうに泣いて居るのを、手水に起きた娘が見つけてあまり不便さに抱いて寝てやつた。

さて治療となると例の如く娘が背後から抱いて居たから、脂汗を流しながら切れものが入るのを、感心にちつと耐へたのに、何處を切違へたか、それから流れ出した血が留まらず、見る／＼内に色が變つて、危くなつた。

醫者も蒼くなつて、騒いだが、神の扶けか漸う生命は取留まり、三日ばかりで血も留つたが、到頭腰が抜けた、固より不具。

之が引摺つて、足を見ながら情なさうな顔をする、蟋蟀が掣がれた脚を口に銜へて泣くのを見るやう、目もあてられたものではない。

しまひには泣出すと、外聞もあり、少焦で、醫者は可恐しい顔をして腕みつけると、あはれがつて抱きあげる娘の胸に顔をかくして絶る状に、年來随分と人を手にかけて醫者も我を折つて腕組をして、はツといふ溜息。

聽て父親が迎にござつた、因果と斷念めて、別に不足はいはなんだが、何分小兒が娘の手を放れようといはぬので、醫者も幸、言譯旁、親兄の心をなだめるため、其處で娘に小兒を家まで送らせることにした。

送つて來たのが孤家で。

其時分はまだ一個の莊、家も小二十軒あつたのが、娘が來て一日二日、ついほだされて逗留した五日目から大雨が降出した。瀧を覆すやうで小歇もなく家に居ながら皆蓑笠で凌いだ位、茅葺の繕ひをすることは扱置いて、表の戸もあけられず、内から内、隣同士、おう／＼と聲をかけ合つて纔に未だ人種の世に盡きぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠ると九日目の眞夜中から大風が吹出して其風の勢こ、が峠といふ處で忽ち泥海。

此の洪水で生残つたのは、不思議にも娘と小兒と其に其時村から供をした此の親仁ばかり。

した處で、臆て飽かれると尾が出来、耳が動く、足がのびる、忽ち形が變するばかりぢや。
 いや臆て、此の鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。
 妄念は起さず早う此處を退かつしやい、助けられたが不思議な位、嬢様別してのお情ぢやわ、
 生命冥加な、お若い、屹と修行をさつしやりませ。と又一ツ背中を叩いた、親仁は鯉を提げた
 ま、見向きもしないで、山路を上の方。
 見送ると小さくなつて、一座の大山の背後へかくれたと思ふと、油旱の焼けるやうな空に、其
 の山の巔から、すく〜と雲が出た、瀧の音も靜まるばかり殷々として雷の響。
 藻抜けのやうに立つて居た、私が魂は身に戻つた、其方を拜むと齊しく、杖をかい込み、小笠
 を傾け、踵を返すと慌しく一散に駈け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨、親仁が婦人に齎ら
 した鯉もこのために生きて孤家に着いたらうと思ふ大雨であつた。
 高野聖は此のことについて、敢て別に註して教を興へはしなかつたが、翌朝袂を分つて、雪中
 山越にかゝるのを、名殘惜しく見送ると、ちら〜と雪の降るなを次第に高く坂道を上る聖の
 姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。

同一水で醫者の内も死絶えた、さればかやうな美女が片田舎に生れたのも國が世がはり、代が
 はりの前兆であらうと、土地のものは言ひ傳へた。
 嬢様は歸るに家なく、世に唯一人となつて小兒と一所に山に留まつたのは御坊が見らるゝ通り、
 又那の白癡につきそつて行届いた世話も見らるゝ通り、洪水の時から十三年、いまになるまで一
 日もかはりはない。

といひ果てて親仁は又氣味の悪い北叟笑。

(怒う身の上を話したら、嬢様を不便がつて、薪を折つたり水を汲む手助けでもしてやりたいと、
 情が懸らう。本來の好心、可加減な慈悲ぢやとか、情ぢやとかいふ名につけて、一層山へ歸りた
 かんべい、はて措かつしやい。彼の白癡殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換にやあ、嬢様
 は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて黙にするわ、殊に其の洪水以來、山を穿つた
 この流は天道様がお授けの、男を誘ふ怪しの水、生命を取られぬものはないのぢや。
 天狗道にも三熱の苦惱、髪が亂れ、色が蒼ざめ、胸が瘦せて手足が細れば、谷川を浴びると舊
 の通り、其こそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も來る、睨めば美しい木の實も落つる、袖を翳
 せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。
 然もうまれつきの色好み、殊に又若いのが好ぢやで、何か御坊にいうたであらうが、其を實と

海の鳴る時

叔母の家に急用があつて、故郷から六里來た。此處までは小松、動橋、大聖寺、牛首等を経て、越前に通ずる加賀の本街道で、これから田圃路を一里半、開發といふ山を二ツ越すと、辰の口と言つて温泉があつて、叔母なる人は其處に居る。

急ぎのことだし、呼吸もつかずにとあせつたけれども、北國の冬日和、途中から雪が降出したのに、風が加はり、次第に烈しく、荒れに荒れて吹雪となつた。

殊に今渡つたのは、粟生の橋と名づける、名にし負ふ北陸道七大川の隨一たる手取川に架した三百七十幾間といふ凄じいのに白山嵐で、天は一面灰汁色で一擱の雲の形の遮るさへなく吹抜けの、鐵のやうに冷切つた橋の欄干に縋りく、漸々吹倒されるのを免れて踰越しながら越した。手足は凍える、膚も固くなつて窘んだ處へ、又一當、颯と渦いて來る雪の輪の中へ、身體が入ると、思はず、くるくると廻つた。

ほッ、といふ引呼吸。目當の腰障子を突外すが如くにして飛込んだのは、粟生といふ寒村の中ほどに、豆腐と茸の汁、鰯の干物などで、晝食をした、めさせる茶店である。

叔母の許に行く都度は、必ず此店で休むので、知己の親仁は、婆が丹精した襪はぎの、糊の硬

い、綿の厚い、ごつくとした、寝ん寝子半纏を被て爐縁に蹲つて居た。

「やあ、ござらつせえ。」

「酷い風だ。」と其ま、びつたり戸を鎖したが、咄嗟に吹込んだ雪は、斑々として土間に散つた。肩を窘めて身震をして、袖を拂くと着た綿を脱いだやうな我が姿。

「驚いた、驚いたな。何うだらう、爺さん、此雪は。」

「いやもう豪いこつちやで。嫁はお前様今朝のこと、隣村へ用達に出掛けましたが、風の風ぐのを待つてると見えて未だ歸りません。婆あ殿は腰氣で寝て居りますで、お構ひは申されませぬけれど、まあ、ゆつくりと休まつしやい。お前様、其の裳を下しなすつて、乾かしたが可かんべいてや。」

「今日は然うしちやあ居られない、些と急ぐんだから、爺さん許へも寄るのは歸途にと思つたんだが、何しろ堪らないから駈込んだ。お蔭で助かつた。」

「一榻燃す内も身震の出る感じやう。」

「あ、寒さは寒し。何うも橋の上ぢや雪女郎にしめ殺されようとした。」

「其代にやあお前様、何だよ、辰の口へ行かつしやりや、叔母様が又抱いて寝て暖めさつしやる

「へい。」

「馬鹿をいへ、僕はもう二十だぜ。」

「いんにやよ。それでも、未だ小兒だと思つてござらつしやるてや。尤も私が目には嬰兒だ。」

「生意氣をいふぜ、爺さん。」

「何、威張つても埒あ明かねえ。これ、お前様が、母様の膝から下りて色の白い嬰兒でよ、此處等這つて歩行かつたのを、」

と言ひかけて北叟笑みながら左の目へ指をして、「ちやんと睨んでる爺様ぢや、早や其時分は可愛らしい兒だつてが、禪をしめたか憎らしくなりをつたい。」

「可いから打棄つて措け、叔母さんが可愛がらあ。」

「は、は、其處ぢや、其處が可愛くてならぬげな。喜造も辰の口へ仕事に行く度、お前様の叔母様が然う言はつしやるとの、彼は幾歳になつても、私には小兒のやうぢやつてよ。」

「分りました。……そして、喜造どんは居ないのかい。家から乗つて来たのは、此吹雪で曳切れなかつて、橋向うで斷るし、もう草臥て了つたから一番、辰の口まで御苦勞をかけたかぢや。」

「彼はお前様、生憎でござります。昨夜お客様で丁ど其辰の口へ参りましたが、歸りを待つたか、泊りました。此鹽梅ぢや、俵が埋んで、空手で歸らうも知れませぬ。」

「困るな、爺さん、急に歇みさうもあるまいか。」

「然れば。」

戸を引開ける元氣も失せた、屋根裏を仰ぎ、戸口を見返り屹となつて伺へば、深々として、重いものが一面に、唯この宇宙を壓さへる氣勢。盛んに爐にくべた櫓の炎尖も上らず、白晝といふのに、火の色も鮮明ならず、樺色に黒味を帯びて下伏に消えかゝり、且つ燃えて居る。内は暗く、戸の外は、野も山も今渡つた橋も眞白であらう。白山嵐は地をながれて、此邊は急に靜になつた、が、北海を荒すと見える、遙に耳の底に轟々と響くは其音。

此の海鳴の聞ゆる中から、分れて、又別に……轟々と響くのが聞取られて次第に近づく……打傾けば、重々しく、俵の輾轉として來るのである。

「俵が來たよ。」

「や、北の方から……」

はた／＼と煽る戸の外に、ばさり／＼と觸れて、雪を踏みしだく蹠音、人聲。
「お客様、此處でござります。」

「や、悴が戻つて参りました。やい、喜造か、やい。」と老の膝を立てて向直る。
之に答ふる遣さへ無く、急がはしげに戸を開けたが、及腰に敷居を跨いで、喜造は緋の裏の襦

れて見ゆる、處々雪のか、つた金釦の嚴しい外套に、ふつくり包んだ物を、兩手で、胸の處へ抱きながら、踏張つて、うむと、どっこいししよう！

背後に續いて、帽を目深に、鼻筋の通つた口許のしまつた、年紀は二十四五で、中肉中脊といつたのが、俯向きながら、呼吸を白うして急いで入つた。戸外に着けたのは一輛の俵、今、刎上げて疊んだ母衣から、雪はほた／＼落ちて、未だ歇みさうな様子はない。

些と見て、其の蹴込に積んだ客の荷物であらうと思つた、喜造が手なる外套に包んだのは、片頬見えて身を横に、目を塞いだ美人である。

「こりや！ 何うぢやい。」と、爺は口を開いて目を睜る。

「お、若旦那。」

「病人か。」と予は身を開いて居直つた。

「重くはないか。危いよ。……聞かさへ何となく深切な、優しい聲を懸けたのは旅客である。

「否、大丈夫で、未だ柔かい内だから扱好うございませ。父さん、うんと葉を焼いてくんねえ、いや、どっこいしよ。」

と爐の縁に昇据ゑると、がつくり、仰向けになつた、黒髪は銀杏返の根が弛んで、筵へ颯と崩れたのである。

「お絹！」と思はず聲を立てた、此の女は温泉の旅籠屋廻りをして暮す、按摩玄達の養女である。

「え、お絹さんなんで。此女ツたら、飛んでもない。おい、父さん、焦げる位が可いぜ。もう、お客様御心配にやあ及びません。何ね、冷え切つた處へ氣が弛んだ所爲でさ。いゝえ、吹雪の酷い時や、何うして、熊と取組みさうなのが、此通りなんです。へい、お父さん、どん／＼焼いてくんねえ、まあ、お暖んなさいまし。」

「何うぞ。」

「失禮」といつて、さしむかひに爐を擁した、旅客は美人の容體を危んで目も放さず、一寸、何、醫師は頼まれないかい。

「お前様、御心配にやあ及びましねえ、私も心得がござります——悴、悴、まあ、一體、こりや？」「うむ、聞きねえ、お客様は唯御迷惑を遊ばす譯だ。此女は可哀相よ。良くねえのは玄達だ。彼のどめくらめ、名代の、ねえ、若旦那。」

答ふる迄もなく、予は唯頷いたのである。

「でございませう。彼畜生、口の臭えほど、腹が汚えからね。譬ひ養女だつて、何だつて、汝にやあお主筋のお嬢さんだ。其を何と、生肉を削つて骨までしゃぶらうてえ因業なんだからね。御存じの通、非道なことをするなあ評判でさ。」

「其ま、床へお入なすつたと思ひねえ。一度床を敷いて居なくなつた先刻の給仕の美婦だ。此のお絹さんさ。又お客様の處へ遣つて来て、枕頭へ坐つての、お火は、なんてッて極の悪さうによ、畜生め。」

「まあ可いよ、喜造。然うすると、」

「お客様がね、若旦那。」

「おい、其旦那様は此處に在らつしやるんだよ、嘘をついちやあ不可よ。」

「大丈夫です。」と旅客は先んじて笑つて謂つた。喜造は語を繼ぎ、

「最う可いから彼方へおいで、とおつしやつたとね。其切、向うを向いてお寝なすつたんださうです。悪寒くはあるし、この雪だもの。昨日から催してまさ、天氣も憂慮なり、遠路を抱へていらつしやるお少い方にやあ、こりや心配で眠られますまい、喃、父さん、御無理はねえ。

處で、温泉へ入つて温まつて来よう。而したら寝られようと、恚うまあお思ひなすつて、寝衣のま、廊下へおいでなすつた。大分晚いしの、何うして雪が降る時分にや夜中裏山から猿が来て、行水をしようといふ温泉だものを。彼の三階建の恐しい、廣い松屋が寝靜まつて、廊下の火と言やあ湯殿の前の洋燈一個。

其處等をの、父さん、ひよろくと歩行いて居るのがあつてよ、お客様の躑音を聞くと、裏階

此のお客様は、何がなし、昨夜あの松屋へお泊り遊ばしたんです。すると、ほら御承知の玄達め、又女中に握らして、帳場の女房にや内々で、此女をお給仕に出したんです。何時か縣知事様のお目に留まつたと言つて、一時騒いだんでせう。憚りながら舊は三千石のお嬢様だ。此位な容色は澤山はありませんぜ。分けてあんな温泉になんぞ、先づ、掃溜に鶴といや、辰の口にお絹さんだ。お給仕をしながら一寸嬌態でもされた日にやあ、旦那方の前ですが、世の中は好色が多からね、いゝえさ、かく申す手前だつて、へむ」と言つてニタリ。親仁は介抱しつゝ、苦い顔をして、

「何を言やあがる。」

「まあ、聞きねえ。處が此のお客様ばかりは何と言ふお聲懸りもなしで。」

「君、申譯ではないんです。」と旅客は微笑みつゝ、予にいつた。

「打解けて慇懃に、」

「何ういたしまして。喜造、それから。」

「翌日は疾く發つからとおつしやつて、尤も遠路でがすよ、これから東京へ行らつしやるんださうだからね、」

「それは、それは。」と親仁は少い人の顔を見る。

子の蔭へ消えた奴さ。え、氣障ぢやあねえか。猿ぢやあねえ。蝙蝠の化たのぢやあねえ。之が玄達。面の蒼い、瘦せツけたの、ほれ幽霊が大蒜を啖つたといふ風で口の臭い、何うだらう。

一寸見たばかりでも厭な、厭な心持におんなすつたとよ。それから何心なく一風呂お浴びなすつて、上つて、寝衣を召して、可いかい、ひよいと御覽なさるとお前、お座敷の障子の前で今の坊主と先刻の女と、纏れ合つたり、解れたりよ、搦んで居らあ。

透かして見て在らつしやると、坊主は座敷の中へ推入れようとする、此女が其を曲つてる様子。暫時すると、彼極道、女の身體を撫下ろして太股を探りあてやがつて、捻り上げた。苦痛!と殺されるやうな聲で、お前、泣くかとしたら、何うだい、首筋を抱いて動かさないで、兩方の拇指で、口を割つて、畜生、鮪のやうな口からお嬢さんの口へ臭え息を吹込みやあがつた。え、恐しい、私あ話すにさへ唾が走する。ねえ、若旦那、玄達が口をつけた杯は、受けると其の臭氣が手に移るといふんです。尤も口を吸つたんだか、何だか、お分りにやならないんだけど、私が承つてお話をするんですから申すんで、彼は名高いんでさ、いくら折檻をしても、痛いや、苦しいぢやあお絹さんが言ふ事を肯かないと、口を割つて件の息を吹込んだぢやあ、些と我の毒を入れてやらう、賣の能くなるお禁厭だつて吐すんで、皆知つてます。さあ、之を啖つたが最後、彼の女が往生をするんです。其時も其所爲か、悄々座敷へ入ると、坊主はひよいと背後へ退いて、

ひよろ／＼と廊下の隅へ見えなくなつたさうでがす。

お客様は大抵様子がお分んなすつたから、座敷へお歸んなすつて、突伏して泣いて居るお絹さんに、可いから、此方へ、と言つて、床へ入れて、長襦袢一枚の身體を半分向うへ出して固くなつてるは可いが、肩なんざ、氷のやうだから、可哀相に、何うもしやあしない、暖に寝かして遣らうと、嬰兒のやうにお抱きなすつた。

「實に、恐縮。」とばかり自ら嘲るが如くに言つて、旅客は莞爾として、外套の解けた中に、濡れしをれた衣の上から、お絹の胸に手を載せた。呼吸は未だ返さぬが、幽に震へたと思ふと、左の膝を上げて、雪のやうな足を縮めた。

「御奇特でござります。いや、其お志ばかりでも別條はござりませぬてや。」

「其上坊主めに見せるだけ金子はお遣しなすつたつて。飛んでもねえ、御災難だつたけれども、此女は其お心に感じたと見えて、辰の口で以て、私が知らないことなんですから、此奴あお釋迦様でも御存じなからうと言ふことを、寝物語に明したんで。」

實はね、言交した男があるんですとさ。

私は何、些とも何事も分らねえんで、昨夜金澤から歸りの松屋の番頭さんに乗せて行つたでせう。丁ど此のお客様がお發程になるから、大聖寺までの極でお送り申したら可からう、宿場で繼

交る分は構はねえつて、女房さんが言つてくれますもんだから、願つたり叶つたりで、今朝お乗せ申して遣つて来たんですが、辰の口を出る時はほんのちらくだったのが、開發を越える頃からどつと渦を巻いて来たでせう、目も口も開くんぢやありませんや。纒一里半と言ふのを、漸々今しがた、ついこの辻堂の所まで参りますと、田圃道を、何と、前へ廻つて、吹雪に投戻されたやうに、ばつたり。楫を持つてた私の手へ喰ひつきさうにして、留めたのがお絹さんだ。驚いたぢやありませんか。此通素跣足で散髪。定めし背後から呼んだんだらうけれども、人の聲なんぞ聞えるやうな平穩いんぢやねえ。セツ／＼いつて旦那様に一目と言ふから顔をお出しなさるとね、父さん、お手に取りついて、自分が緊乎握つてた、洋服の釦を一個お渡し申してさ、(あの昨夜お話し申しました私の旦那様から頂いた記念です。肌身を放さないで持つて居ましたが、貴下の御深切につけても、今までのお客のことも思はれます。御覽のやうなわけですから、迎も操は守り切れません。絹は死んだと思つて下さいましとおつしやつて、此品をおことづかり下さいまし。)とよ。然ういつてお前、お頼み申したんだがな、お受取なすつて未だ何ともおつしやらないのに、眞蒼になつて反返つた。取敢ず辻堂へ抱へ込んで、お手傳をして介抱はして見たが、火の氣がなくツちやあはじまらねえから、其處で、因縁を承りながら支度をして連れて来たわけよ。若旦那、お客様はお歩行でございましたぜ。」

予は差俯向いて居た。返事もよくせず、唯助けたい此女を、頼むのは叔母である、が、ともかくも、

「何にも申しません。が、そして、其釦はおことづかりなさいますか。」
旅客は慎重に頷いて、

「誰にも謂はないと言ひましたッけ。男の名を聞くと信友です、殊におなじ學校に居るんですから託りませう。何、丁度胸の處の釦ださうで、これを放しちやあ、此の婦人の魂を奪ふやうなものですから、其ま、持つて居るやうに、諭さうかとも思つたんですが、然し、境遇で操が守られないと言つて返す。珍しい心意氣ですから、故とお預りませう。私は急ぎますから此ま、失禮しますが、あとで、私が世に出て、救けて遣ることが出来る時まで、其男には黙つて確と預つて置かうも知れぬ。何しろ身體を大切に、貴下言つてやつて下さい、——それぢやあ、……姉さん、もう行くよ。」と言つて、旅客は胸に置いた手を引いた。女は夢中ながら、其の手を追ふが如く、玉のやうな腕を上げた。炎尖は燈と立つて、片頬に血の色が浮んで見えた。

親仁が、

「占めたぞ。」と言ふまゝに、茶店の親子と予等兩人。

「姉さん、」

湯女の魂

「お絹さん、お絹さん。」
女は唇を結んだまゝ、眉を擡めたまゝ、聲も微に應じたのである。
「あゝい。」

字を切ります目當に立てて置く、竹切、棒などが折れるといひます。
 然し可加減な話だ、今時那樣ことがある譯のものではないと、或人が一人の坊さんに申します
 と、其の坊さんは黙つて微笑みながら、拇指を出して見せました、些と落語家の申します蒟蒻問
 答のやうでありますけれども、其の拇指を見せたのであります。
 そして坊さんが言ふのに、先づ見た處此の拇指に、何の位な働きがあると思はつしやる、譬へ
 ば店頭で小僧どもが、がやく騒いで居る處へ、来たよといつて拇指を出して御覽なさい、びつ
 たりと静りませう、又若い人に一寸小指を見せたら何うであらう、銀座の通で手を舉げれば、鐵
 道馬車が停るではなからうか、最一つ其上に笛を添へて、片手をあげて吹鳴らす事になりますと、
 停車場を汽車が出ますよ、使ひ處、用る處に因つては、之が人命にも關はれば、喜怒哀樂の情も
 動かします。之をでかばちに申したら、國家の安危に係はるやうな、機會がないとも限らぬ、其
 の拇指、其の小指、其の片手の働きで。
 然るを況んや臨兵闘者皆陣列在前といひ、令百由旬内無諸哀艱と唱へて、四縦五行の九字を切
 るに於ては、いかばかり不思議の働をするかも計られまい、と申したといふことを聞いたのであ
 ります。

いや、餘事を申し上げまして恐入りますが、唯今私那不束に演じますお話の中頃に、山中孤家

誠に差出がましく恐入りますが、暫時御清聴を煩はします。
 八宗の中にも眞言宗には、祕密の法だの、九字を切るだのと申しまして、不思議なことをする
 のであります、尤も此の宗門の出家方は、始めから寒垢離、斷食など種々な方法で法を修する
 のでございまして、向うに目指す品物を置いて、之に向つて呪文を唱へ、印を結んで、鍊磨の功
 を積むのなさうであります。
 修鍊の極致に至りますと、隱身避水火遁の術などはいふまでもございませぬ、如意自在な法
 を施すことが出来るのだと申すことで。
 或眞言寺の小僧が、夜分墓原を通りますと、樹と樹との間に白いものがかゝつて、ふらくくと
 動いて居た。暗さは暗し、場所柄は場所柄なり、可恐さの餘り齒の根も合はず顫へ顫へ呪文を唱
 へながら遁げ歸りましたさうであります、翌日見ますると其處に乾かしてございしました浴衣
 が、寸々に裂けて居たと申しますよ、修行も其位になりました此の小僧さんなぞのは、向つて九

の怪しい婦人が、ちんぷい〜御代の御寶と唱へて蝙蝠の印を結ぶ處がありますから、一寸申上げて置くのであります。

扱てこれは小宮山良介といふ學生が、一夏北陸道を漫遊しました時、越中の國の小川といふ温泉から湯女の魂を託つて、遙々東京まで持つて参つたといふお話。

越中に泊と云つて、家數千軒ばかり、一寸繁昌な町があります、伏木から汽船に乗りますと、富山の岩瀬、四日市、魚津、泊となつて、それから糸魚川、關、親不知、五智を通つて、直江津へ出るのであります。

小宮山は其日、富山を朝立、此の泊の町に着いたのは、午後三時半頃。繁昌な處と申しながら、街道が一條海に添つて居りますばかり、裏町、横町などと、謂つてもないのであります、其の町の半頃の唯有る茶店へ、草臥れた足を休めました。

二

澁茶を喫しながら、四邊を見る。街道の景色、又格別てございまして、今は驛路の鈴の音こそ聞えませぬが、馬、車、處の人々、本願寺詣の行者の類、之に豆腐屋、魚屋、郵便配達などが交つて往來引きも切らず、「早稲の香や別け入る右は有磯海」と云ふ芭蕉の句も、此邊といふ名代の

荒海、此處を三十噸、乃至五十噸の越後丸、觀音丸などと云ふのが、入れ違ひまする煙の色も荒海を乗越す爲か一際濃く、且つ勇ましい。

茶屋の裏手は遠近の山又山の山續きで、其日の靜かなる海面よりも、一層却つて高波を颯らしてゐるやうであります。

小宮山は、快く草臥を休めました、何か思ふ處あるらしく、此の茶屋の亭主を呼んで、「御亭主、少し聞きたい事があるんだが。」

「へい、お客様、何でもござりますな。」

氷見鮭の鹽味、放生津鯿の善惡、糸魚川の流れ鹽梅、五智の如來へ海豚が参詣を致しまする様子、其の鳴聲、最些と遠くは、越後の八百八後家の因縁でも、信濃川の橋の間敷でも、何でも存じて居りますから、は、は、は、。

と片肌脱、身も軽い、口も軽い。小宮山も莞爾して、

「折角だがね、先づそれを聞くのぢやなかつたよ。」

「それはお生憎様でござりまするな。」

「私の聞きたいのは、此處に小川の温泉と云ふのがあつて、其事なんだが何うだね。」

「え、ござりますとも、人足も通ひませぬ山の中で、雪の降る時白鷺が一羽、疵所を浸して居りましたのを、狩人の見附けましたのが始り、ついで此の八九年前から開けました。一體、此の泊の或財産家の持地でござりますので、假の小屋掛で近在の者へ施し半分に遣つて居りました處、さあ、盲目が開く、躡が立つ、子供が産れる、乳が出る、大した効能。いやもう、神の如しとござりまして、所々方々から、彼岸詣のやうに、ぞろ／＼と入湯に参りまする。

處で、二階家を四五軒建てましたのを今では譲受けた者がござりまして、座敷も綺麗、お肴も新らしい、立派な本場の温泉となりまして、私は恠やうな田舎者で存じませぬが、何しろ江戸の日本橋ではお醫者様でも有馬の湯でもと云うた處を、藝者が、小川の湯でもと唄ふさうでござりますが、其邊は旦那御存じでござりませうな。如何様で。」

反對に鐵砲を向けられて、小宮山は開いた口が塞がらず。

「土地繁昌の基で、それはお目出度い。時に、其小川の温泉までは、何のくらゐの道だらう。」

「は、あ、之から被行しやるのでござりますか。それならば、山道三里半、車夫などにお尋ねになりますれば、五里半、六里などと申しますが、それは丁場の代價で、本當に譯はないのでござりまする。」

「ふむ、三里半だ可し。そして何か柏屋と云ふ温泉宿は在るかね。」

「柏屋！ え、もう小川で一等の旅籠屋、疊も此頃入換へて、障子も此頃張換へて、お湯もどんどん沸いて居ります。」

と年甲斐もない事を言ひながら、亭主は小宮山の顔を見て、いやに聲を密めたのでありますな、怪からん。

「へ、へ、へ、好い婦人が居りますぜ。」

「何を言つて居るんだ。」

「へ、へ、へ、お湯をさして参りませうか。」

「お茶も多度頂いたよ。」

と小宮山は傍を向いて、飲さしの茶を床几の外へざぶり明けて身支度に及びまする。

三

小宮山は亭主の前で、女の話が冷然として刎ね附けましたが、密に思ふ處がないのではありませぬ。一體此の男には、篠田と云ふ同窓の友がありまして、いつでも其の口から、足下若し折があつて、北陸道を漫遊したら、泊から譯はない、小川の温泉へ行つて、柏屋と云ふのに泊つて見ろ、於雪と云つて、根津や、鶯谷では見られない、田舎には珍らしい、佳い女が居るからと、度

度聞かされたのでありますが、唯、佳い女が居るとばかりではない、其が篠田とは浅からぬ關係があるやうに思はれます、小宮山は何の道一泊するものを、乾燥無味な旅籠屋に寝るよりは、多少色艶つばい其の柏屋へと極めたので。

扱て、亭主の口と盆の上へ、若干かお鳥目はずんで、小宮山は紺飛白の單衣、白縮緬の兵児帯、麥藁帽子、脚絆、草鞋と云ふ扮装、荷物を振分にして肩に掛け、既に片影が出来て居りますから、蝙蝠傘は疊んで提げながら、茶店を發つて、従是小川温泉道と書いた、傍示杭に沿いて参ります。

行くこと凡そ二里ばかり、それから爪先上りのだら／＼坂になつた、其れを一里半、泊を急ぐ旅人の心には、彼是三里餘も來たらうと思ふと、漸く小川の温泉に着きましてございます。

志す旅籠屋は、尋ねると直ぐに知れた、有名なもので、柏屋金藏。

其のまゝ、ずつと小宮山は門口に懸ります。

「被入しやいまし。」

「お早いお着。」

「お疲れ様で。」

と下女共が口々に出迎へます。

帳場に居た亭主が、算盤を押遣つて、

「これ、お洗足を。それ御案内を。」

とちやほや、貴公子に對する待遇。服装もお聞きの通り、それさへ、汗に染み、埃に塗れた、草鞋穿の旅人には、過ぎた扱ひをいたします。此の温泉場は、泊から纔か四五里の違ひで、雪が二三尺も深いのでありまして、冬向は一切浴客はありませんで、野猪、狼、猿の類、鷺の進、雁九郎などと云ふ珍客に明け渡して、旅籠屋は泊の町へ引上げる。賑ひますのは花の時分、盛夏三伏の頃、唯今は最う九月中旬、秋の初で、北國は早く涼風が立ちますから、之が逗留の客と云ふ程の者もなく、二階も下も伽藍堂、偶まのお客は、難船が山の陰を見附けた心持でありますから。

「此方へ。」と婢女が、先に立つて導きました、奥座敷上段の廣間、京間の十疊で、本床附、疊は滑るほど新らしく、襖天井は輝くばかり、誰の筆とも知らず、藥草を銜へた神農様の畫像の一軸、之を床の間の正面に掛けて、花は磯馴、彼處等は遠州が流行りまする處で、亭主の好きな赤烏帽子、行儀を崩さず生かつて居る。

小宮山は其の前に、悠然と控へました。

扱て、お茶、煙草盆、御挨拶は略しまして、頓て持つて來た浴衣に着換へて、一風呂浴びて戻

小宮山は故とらしく威儀を備へ、

「おや。」
「何、お雪さんと云ふのが居る？」
と小宮山は、金の脈を掘當てましたな、豫ての話が事實となつたのでありますから、漫に勇んだので乗出しやうが尋常事ではありませんから、

「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」
「何、お雪さんと云ふのが居る？」

「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

「皆で四人。」
「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「はい、然やうでございますよ。」
「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」

る。誠や温泉の美しくさ、肌、骨までも透通り、そよ／＼と風が身に染みる、小宮山は廣袖を借りて手足を伸ばし、打縦いでお茶菓子の越の雪、否、廣袖だの、秋風だの、越の雪だのと、お愛想までが薄ら寒い谷川の音ももの寂しい。
湯上りで、眠氣は差したり、道中記を記けるも懶し、入る時帳場で聲を懸けたのも、座敷へ案内をしたのも、浴衣を持つて来たのも、お背中を流しませうと言つたのも、皆手隙と見えて、一人々々入交つたが、根津、鶯谷は扱て置いて、柳原にもない顔だ、於雪と云ふのは何うしたらう、おや女の名で、又寒くなつた、是れぢや晩に熱燗で一杯遣らずばなるまい。

四

鮎の大きいのは越中の自慢であります、最早落鮎になつて居りますけれども、放生津の鱈や、氷見の鯖より優でありますから、魚田に致させまして、吸物は湯山の初茸、後は玉子焼か何かで、一銚子つけさせまして、杯洗の水を切るのが最初。

「姉さん、お前に一つ。」
などと申します時分には、小宮山も微醉機嫌、向うについてをりますのは、目指すお雪ではなくて、初霜とや謂はむ。薄く塗つた感心に襟脚の太くない、二十歳ばかりの、愛嬌たつぶりの

女で、二つ三つは行ける口、四方山の話も機む處から、小宮山も興に入り、思はず三四合を傾けます。

後の花が遠州で、前の花が池の坊に座を構へ、小宮山は古流と云ふ身で、くの字になり、些いと杯を差置きました。

「姉さん、新らしく尋ねるまでもないが、此處はたしか柏屋だね。」
「はい、然やうでございますよ。」

「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だね。」
「皆で四人。」

「四人？ 成程四人かね。」
「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「何、お雪さんと云ふのが居る？」
と小宮山は、金の脈を掘當てましたな、豫ての話が事實となつたのでありますから、漫に勇んだので乗出しやうが尋常事ではありませんから、

「おや。」
「何、お雪さんと云ふのが居る？」
と小宮山は、金の脈を掘當てましたな、豫ての話が事實となつたのでありますから、漫に勇んだので乗出しやうが尋常事ではありませんから、

「手前は柏屋でございます。」
 小宮山は苦笑を致しましたが、已む事を得ず、
 「それぢや柏屋の姉さん、一つ申上げることによしう。」
 「まあお酌を致しませう。私だつて可いぢやありませんか、あれさ。」
 「いや全く。お雪さんでも、酒はもう可かんのだよ。」
 「それぢや御飯をおつけ申しませう、ですがお給仕となると猶の事、誰かにおさせなさりたうございませうね。」
 「何、それにや及ばんから、御最眞分に盛を可く、ね。」
 「いえ、道中筋で盛の可いのは、御家來衆に限りませうとさ、殿様は軽く多度換へて召食りまし。はい、御膳。」
 「洒落かい、いよ柏屋の姉さん、本當に名を聞かせておくれよ。」
 「手前は柏屋でございます。」
 「お前の名を問ふのだよ。」
 「手前は柏屋でございます。」
 と上手に御飯を装ひながら、ぼたく／＼愛嬌を溢しますよ。

「然うだ、お前さんの名は何と云ふ。」
 「然うだは御挨拶でございますこと、私は名も何もございませんよ。」
 「い、えさ、何と云ふのだ。」
 「お雪さんにお聞きなさいまし、貴方は御存じで被在しやるんだよ、可憎しうございますねえ、でもあのお氣の毒さまでございますこと、お雪さんは貴方、久しい間病氣で臥つて居りますが。」
 「何、病氣だい、」
 「はあ、ぶらく／＼病なんでございますが、此頃は又氣候が變りましたので、めつきりお弱んなすつたやうで、取亂して居りますけれど、貴方御用ならば些いとお呼び申して見ませうか。」
 「いえ、何、それにや及ばないよ。」
 「あのう、屹度参りませうよ、外ならぬ貴方様の事でございませぬもの。」
 「何うでせうか、此方様にも御存じはなしさ、たゞ好い女だつて途中で聞いて來たもんだから、何うぞ悪しからず。」
 「何う致しまして、憚様。」
 と言つたばかり、些いと言葉が途絶えましたから、小宮山は思ひ出したやうに、
 「何と云ふのだね、お前さんは。」

御膳の時さへ、何かと文句があつたほど、此の分では寝る時は容易でなからうと、小宮山は内恐縮をして居りましたが、女は大人しく床を伸べて了ひました。夜具は申すまでもなく、絹布の上、枕頭の火桶へ湯沸を掛けて、茶盆をそれへ、煙草盆に火を生ける、手當が行届くのであります。

餘の上首尾、小宮山は空可恐しく思つて居ります。女は慇懃に手を突いて、

「それでは、お緩り御寝みなさいまし、未だお早うございますから、私共は皆起きて居ります、御用がございましたら御遠慮なく手をお叩き遊ばして、それからあのお湯でございませうが、一晩沸いて居りますから、幾度でも御自由に御入り遊ばして、お草臥にも、お體にも大層利きますのでございませうよ。」

と大人しやかに眞面目な挨拶、殊勝な事と小宮山も更り、

「色々お世話だつた。お蔭で心持好く手足を伸すよ、姐さんお前ももう休んでおくれ。」

「はい、難有うございます、それでは。」
と言つて行かうとしましたが、弗と坐り直しましたから、小宮山は、はてな、柏屋の姐さん、

こゝらで其の本名を名告るのかと可笑しくもございませう。

すると、女は後先を眺しましたが、じり／＼と寄つて参り、

「時につかぬ事をお伺ひ申しまして、恐れ入りますが、貴方は方々御旅行をなさいまして、可恐しい目にお逢ひ遊ばした事はございませうか。」

小宮山は、妙な事を聞くと思ひましたが、早速、

「いや、幸ひ暴風雨にも逢はず、海上も無事で、汽車に間違もなかつた。道中の胡麻の灰などは難有い御代の事、それでなくつても、見込まれるやうな金子も持たずさ、足も達者で一日に八里や十里の道は、團子を嚙つて野々宮高砂と云ふのだから、つひぞまあ是が可恐しいと云ふ目に逢つた事はないんだよ。」

「いえ、那樣事ではないのでございます。狸が化けたり、狐が化けたり、大入道が出ましたなんて、言ふやうな、其の事でございませう。」

「馬鹿な事を言つちや可かん、子供が大人になつたり、嫁が姑になつたりするより外、今時化けるつて奴があるものか。」

と一言の許に笑つて退けたが、小宮山は此女何を言ふのか知らず、却つて眉毛に唾を附けたのであります、女は極く生眞面目で、

「其時は甚麼に可恐しうございませう、苦しいの、切ないの、一層殺して欲しいの、とお雪さんが呻きまして、ひい／＼泣くんでございますもの、そしてね貴方、誰かを擱へて話でもするやうに、何だい誰だ、などと言ふではございせんか、其時はもう内曲の者一同、傍へ参ります處ではございせんよ、何だつて貴方、異類異形のものが、病人の寢間にむら／＼して居りますやうで、遠くゝゝるて皆が耳を塞いで、突伏して了ひますわ。

それですから、其の苦しみます時傍に附いて居て、撫で擦りなど爲る事は誰も怪我にも出来ません。病人は薬より何より、たゞ一晩おち／＼心持好く寐て、何うせ助らないものを、切めてそれを思ひ出して死にたいと。肩息で貴方ね、口癖のやうに申すんですよ、何うぞまあそれだけでも協へて遣りたいと、皆が心配をしますんですが、加持祈禱と申しまして、何うして貴方此邊等は皆狸の法印、章魚の入道ばつかりで、當になるものはありやしません。

それに、本人を倚掛させますのには、しつかりなすつて、自分でお雪さんが頼母しがらやうな方ではなくつちや可けますまい、それですのに些い／＼お見えなさいまする、何のお客様も、お止し遊ばせば可いのに、お妖怪と云へば先方で怖がります、田舎の意氣地無しばかり、俺は蟒蛇に吞まれて天窓が兀げたから湯治に來たの、狐に蚯蚓を食はされて、それが爲お肚を痛めたの、天狗に腕を折られたの、私共が聞いてさへ、馬鹿々々しいやうな事を言つて、それが眞面目だらう

「實はお客様、誠に申兼ねましたが、少々お願ひがございますんですよ、外の事ではありませんが、曩貴方のお口からも、些いとお話のございまして、あのお雪さんの事でございしますが、佳い女は何故那麼に體が弱いのでございませうねえ。平生からの處へ、今度煩ひ附きまして、最う二月三月、十日ばかり前から、又大變に悩みますので、醫者と申しまして、三里も参らねばなりません。薬も何も貴方何の病氣だか、誰にも考へが附きませぬので、たゞもう體の補ひになりやすやうなものを食べさせて置くばかりでございしますが、此頃ぢや段々瘦せ細つて、お粥も薄いでなければ戴かないやうになりました。氣心の好い平生大人しい人でありますから、私共始め御主人も、彼是氣を揉んで居りますけれども、何處が痛むと云ふではなし、苦しいといふではなし、勞りやうがないのでございませう。それでね、貴方、其の病氣と申しますのが、風邪を引いたの、お肚を痛めたのと云ふのではない様子で、まあ、申せば、何か生靈が取着いたとか、狐が見込んだとか云ふのでございませう。何でも悩み方が變なのでございませう。其の證據には毎晩同じ時刻に魔されましてね。」

小宮山も他人ごとのやうには思ひませぬ。

ぢやありませんか。

ですもの、何うして病人の力になんぞ、なつてくれる事が出来ませう。

「慥う申しちや押着けがましうございますが、貴方はお見受け申したばかりでも、那樣怪しげな事を爪先へもお取上げ遊ばすやうな御様子は無い、本當に頼母しくお見上げ申しますんで。」

「實は病人は貴方の御話を致しました處、然うでなくつてさへ東京のお方と聞いて、病人は飛立つばかり、何うぞお慈悲にと申しますのは、私共からもお願ひ申して上げますのでございますが、誠に申し兼ねましたが、一晚お傍で寝かし被下いまして、然うして本人の願を協へさして遣つて下さいまし、後生でございますから。」

それに様子をお見届け下さいますれば、甚麼にか難有うございませう。」

と染々、早口の女の聲も理に落ちまして、所謂誠は其の色に顯れたのでありますから、唯今怪しい事などは、身の廻り百由旬の内へ寄せ附けないと云ふ、見立てに預りました小宮山も、是を信じない譯には行かなくなつたのでありまする。

「そりや何しろ飛だ事だ、私は武者修行ぢやないのだから、妖怪を退治ると云ふ腕節はないかはりに、幸ひ臆病でないだけは、御用に立つて、可いとも！ 望みなら一晚看病をして上げよう。左も右も今の其の話を聞いても、其の病人を傍へ寝かしても、何うか可恐しくないやうに思はれ

るから。」

と小宮山は友人の情婦ではあり、煩つて居るのが可哀さうでもあり、殊には血氣壯なもの好

奇心も手傳つて、異議なく承知を致しました。

「然し姐さん、別々に爲るのだらうね。」

「何でございます。」

「何其の、お床の儀だ。」

「おほ、お雪さんにお聞きなさいまし。」

「可煩いな、まあ可いや。」

「然やうならば、何うぞ。」

「可しく。其換姐さん、お前の名を言はないのぢや……、」

「手前は柏屋でございます。」

と急いで出て行く。

「是は旦那様。」

入交つて亭主柏屋金藏、揉手を爲ながら裏に挨拶に來た時より、打解けまして馴々しく、

「何うも行届きませんで、御粗末様でございます。」

「いや色々、さあすつと此方へ、何か女中が御病氣ださうで、お前さんも、何かと御心配でありませう。」

「へい、其の事に就きまして、唯今は又飛んだ手前勝手な御難題、早速御開濟下さいまして何も相済みませぬ。實は私からお願ひ申しまする筈でござりましたが、恠やうなものでも、主人とおぼしめ成りませぬ處を斷つても御承知下さいますやうでは、恐れ入りますから、御斷の遊ばし可いやう、故と女共から御話を致させましたのでござりますが、恠やうに御心安く御承諾下さいますは、却つて失禮になりましてござりまする。」

早速當人にも相傳へまして、久しぶりで飛んだ喜ばせて遣りました。全く御蔭様でござりまする。何が貴方、豫ての心懸が宜しうござりまするので、私共もはや、特別に目を懸けまして、他人のやうに思ひませぬから、毎晩魔さされますのが、目も當てられませぬ、然ればと申して、目を塞いで寝まする譯には參りませぬ、いやもう。」

と言懸けて、頷く小宮山の顔を見て、てか／＼とした天窓を搔き、

「恠やうな頭を致しまして、あてこともない、化物沙汰を申上げまするばかりか、謔語の藥にもなりませんと云ふは、誠に早や以ての外でござりますが、自慢にも何にもなりません、生得大の臆病で、引窓がぱたりと云つても筈が仆れても怖な喫驚。」

それに何と、如何に秋風が立つて、温泉場が寂れたと申しましたも、まあお聞き下さいまし。飛でもない奴等、若い者に爺婆交りで、泊の三衛門が百萬遍を、何でござりませう、此の湯治場へ持込みやがつて、今に聞いて被在隣宿で始めますから、けたいが悪いぢやござせんか、此節あ毎晩だ、五智で海豚が鳴いたつて、那魔不景氣な聲は出しますまい。

憑物のある病人に百萬遍の景物ぢや、いやもう泣きたくなります。は、は、泣くより笑とは此事で、何に就けてもお客様に御迷惑な。」

「何有、此方の迷惑より、然う云ふ御様子では嘸御當惑をなさるでありませう、恠う遣つてお世話になるのも何かの御縁でせうから、皆さん遠慮しないが宜しい。」

と二人で差向で話をして居ります内に、お喜代、お美津でありませう、二人して夜具をいそいそと持運び、小宮山のと竝べて、臥床を設けたのでありますが、客の前と氣を着けましたか、使つてるものには立派過ぎた夜具、敷蒲團、疊んだま、裾へふつかりと一つ、それへ乗せました枕は、病人が始終黒髪を取亂して居るのでありませう、夜の具の清らかなるには似ず垢附きまし

て、思倣しか、涙の跡も見えたのであります。

お美津、お喜代は、枕の兩傍へ些いと屈んで、きうツ／＼と眞直に引直し、小宮山に挨拶をし、廊下の外へ。

此處へ例の女の肩に手弱やかな片手を掛け、惱ましい體を、少し倚懸り、下に浴衣、上へ襦子の襟の掛つた、縞物の、白粉垢に冷たさうなのを襲ねて、寢衣のまゝの姿であります、幅狭の巻附帯、髪は櫛卷にして居りますが、然まで結ぼれても見えませぬのは、客の前へ出るといふので櫛の齒に女の優しい心を籠めたものでありませう。年紀の頃は十九か二十歳、色は透通る程白く、鼻筋の通りました、窶れても下脹な、見るからに風の障るさへ痛々しい、葛の葉のうらみ勝なる其の風情。

八

高が氣病と聞いたものが、思ひの外のお雪の様子、小宮山は先づ哀れさが先立つて、主と顔を見合せます。

介添の女は故と浮いた風で、

「さあ御縁女様。」

と強く手を引いて扶け入れたのであります。お雪は那樣中にも、極が悪かつたと見え、ぼんやり顔をば根らめまして、あはれ霜に惱む秋の葉は美しく、蒲團の傍へ坐りました。

「お雪さん、嬉しいでせう。」

亭主までが嬉しさに、莞爾々々して、

「能くお禮を申上げな。」

と言ふのであります。別けて申上げますが、是から立女役が總て女寅が煩つたと云ふ、優しい哀なれ聲で、ものを言ふのであります。春葉君だと名代の良い處を五六枚、上手に使ひ分けまして、誠に好都合でありますけれども、私の地聲では、些とも情が寫りますまい。其邊は大目に、否、お耳にお聞溢しを願ひまして、お雪は面映氣に、且つ優らしく手を支へ、

「難有う存じます、何うぞ、……」

とばかり、取継るやうに申しました。小宮山は、亭主と云ひ、女中の深切、お雪の風采、其や是や胸一杯になりました。思はずほろりと致しましたが、然りげなう、唯頷いて居たのであります。

「そらお雪、何うせ恚うなりや御厄介だ。お時儀も御挨拶も既に通り越して居るんだからの、御遠慮を申さないで、早く寝かして戴くと可い、寒いと悪からう。俺でさへぞく／＼する、病人は

猶の事ツた、お客様も最う御寝なりまし、お鐵や、それ。

と急遽して、實は逃構も少々、此の臆病者は、病人の名を聞いてさへ、悚然とする様子で、

お鐵(此奴あ念を入れて名告る程の事ではなかつた)は袖屏風で、病人を勞つて居たのでありま
すが、

「さあ〜早く其の中へ、お床は別々でも、お前さん何だよ御婚禮の晩は、女が先へ寝るものだ
よ、まあさ、御遠慮を申さないで、同じ東京のお方ぢやないか、裏の山から見えるなんて、噂ば
かりの日本橋のお話でも聞いて、ぐつと氣をお引立てなさいなね。水道の水を召食ツて被在しや
れば、お色艶もそれ、お前さんの那の方に、ねえ旦那。」

「先づの。」

と言つたばかりで、金藏はまじり〜。大方時刻の移るに従うて、百萬遍を氣に爲るのであり
ませう。お鐵は元氣好く含羞むお雪を柔かに素直に寝かして、袖を叩き、裾を壓へ、

「さあ、お客様。」

と言つたのでありますが、小宮山も人目のある前で枕を並べるのは、氣が差して跋も悪うご
ざいますから、

「まあ〜お前さん方。」

「然やうならば、御免を蒙ります。伊賀越でおいでなすつたお客ぢやないから、私が股引襦
ても穿いて寝るには及ばんわ、喃お雪。」

「旦那笑談ではございませんよ、失禮な。お客様御免下さいまし。」

と二人は一所に挨拶をして、上段の間を出て行きます。親仁は兩提の蓑入をぶら提げながら、
克明に禿頭をちやんと据ゑて、てく〜と敷居を越えて、廊下へ出逢頭、わツと云ふ騒動。
「痛え。」とあいたしこをした様子。

囊から障子の外に、様子を窺つて居りましたものと見える、誰か女中の影に怯えたのでありま
する。笑ふやら、喚くやら、ばた〜と云ふ内に、お鐵が障子を閉めました。後の十疊敷は寂然
と致し、二筋の燈心は二人の姿と、床の間の花と神農様の像を、朦朧と照します。

九

小宮山は所在無さ、頓て横になつて衾を肩に掛けましたが、お雪を見れば小さやかにふつかり
と臥して、女雛を綿に包んだやうであります。素より内氣な女の、先方から聲を懸けようとは
致しませぬ。小宮山は一晚介抱を引受けたのでありますから、先づ醫者の氣になりますと物も
いひ好いのであります。

「姉さん、然ぞ心細いだらうね、お察し申す。」

「はい。」

「一體甚麼心持なんだい。何でも悪い夢は、明かしてばッばと言ふものだと言ふのだから、心配事は人に話をする方が、気が霽れて、其れが何より保養になるよ。」

と染々勞つて問ひ慰める、眞心は通つたと見えまして、少し枕を寄せるやうにして、小宮山の方を向いて、お雪は溜息を吐きました。

「貴方は東京のお方でございますつてね。」

「うむ、東京だ、是でも江戸ッ兒だよ。」

「あの、然う伺ひますばかりでも、私は故郷の人に逢ひましたやうで、お可懐しいのでござりますよ。」

「東京が眞眞かい、それは難有いね、而して此處等に、眞眞は珍しいが、何か仔細が有りさうだな。」

小宮山は、聞きませんでも其の因縁を知つて居りませう、けれども、思ふさま心の内を話さして、左に右慰めて遣りたい心。

「東京は大層廣いさうでございますから、泊のものを、此方で存じて居りますやうな譯には参り

ますまいけれども、あのう、私は篠田様と云ふ、貴方の御所の方に、少し知己があるのでございまして。」

小宮山は肚の内、是だな……。

「譯は申上げる事は出来ませんが、其のお方の事が始終氣に懸りまして、其が爲に、いつでも泣いたり笑つたり、自分でも解りませんほど、氣を揉んで居りました。それがあの、病の原因なんでございますませう。」

晝も夜も何方で夢を見るのか解りませんやうな心持で、始終ふらふら致して居りましたが、お薬も戴きましたけれども、復つてから何うと云ふ張合がありませんから、弱りますのは體ばかり、日が経ちますと起きてるのが大儀でなりませんので、何處が痛むと云ふでもなく、寢てばかり居りましたのでございませうよ。」

「さあ驕れ、手も無くそれは戀病だと、此處で言はれた譯ではありませんから、小宮山は人の意氣事を畏まつて聞かされたのであります、勿論容體を聞く氣でありますから、お雪の方でも、醫者だと思つて遠慮がない。」

「久しく那様に致して居ります内、丁度此の十日ばかり前の眞夜中の事でございませう。寐られません目をばちくして、瞞めて居りました壁の表へ、繪に描いたやうに、茫然、可恐しく脊の高

（此の釘は丑の時參が、猿丸の杉に打込んだので、呪の念が錆附いてるだらう、能くお見。是はね大工が家を造る時に、誤つて守宮の洞の中へ打込んだものぢや、それから難破した船の古釘、此にあるのは女の抜髪、蜥蜴の尾の切れた、ぴち／＼動いてるのを見なくちや可けない。）と差附けられました時は、ものも言はれませんか。

（お雪、私が是を何にする、定めしお前は知つて居るよう。）何うして私が知つて居りませう。（うむ、知つて居る、知つて居る筈ぢやないか、何うだ。）と責めるやうに申しますから、私は何うなる事とせうと、可恐しさのあまり、何にも存じませんと、自分にも聞えませんくらゐ。

い、お神さんの姿が顯れまして、私が夢かと思つて、熱と瞶めて居ります中、寢音もせず壁から抜け出して、枕頭へ立ちました。が、面長で險のある、鼻の高い、凄く好い年増なんぞございませよ。それが貴方、着物も顔も手足も、稲光を浴びたやうに、蒼然と見えました。

「可訝しいね。」

「當然なら、あれとか、きやツとか聲を立てますのでございませうが、何う致しましたのでございませうか、別に怖いとも思ひませんと、恚う遣つて。」

と枕に顔を仰向けて、清しい目を睜つて熟と瞳を据ゑました。小宮山は悚然とする。

「其のお神さんが、不思議ではありませんか、ちやんと私の名を存じて居りました、

（お雪や、お前、餘り可哀さうだから、私が其の病氣を復して上げる、一所においで。）と立つたま、手を引くやうに致しましたが、いつの間にも私の體は、那の壁を抜けて戸外へ出まして、見覺のある裏山の方へ、冷たい草原の上を、貴方、跣足ですた／＼參るんでございませう。」

「零餘子などを取りに參ります處で、知つて居りますんでございませうが、那樣家はある筈はございませう、破家が一軒、それも茫然して風が吹けば消えさうな、其處に住居なんでございませう。」

お神さんは私を引入れましたが、内に入りますと貴方何うでございませう、土間の上に臺があつて、荒筵を敷いてあるんでございませう、其處等は一面に煤ぼつて、土間も微が生えるやうに、じく／＼して、隅の方に、お神さんと同じ色の眞蒼な灯が、ちよろ／＼と點れて居りました。

（何うだ、お前此處にあるものを知つて居るかい。）とお神さんは、其の筵の上にあるものを、指を指して見せますので、私は恐々覗きますと、何だか厭な匂のする、色々な雜物がございませう。

（是は、皆人を礎に上げる時に結へた繩だ）つて扱いて見せるのでございませう。私はもう、氣味が悪いやら怖いやら、がた／＼顫へて居りますと、お神さんがね、貴方、ざくりと釘を掴みまして、

(何存ぜぬことがあるものか、これはな、お雪、お前の體に使ふのだ、是で其の病氣を復して遣る。)と屹と睨んで言はれましたから、私はもう舌が硬つて了りましたのでございます。お神さんは落着き拂つて、何か身繕をしました。が、呪文のやうなことを唱へて、其の釘だの繩だのを、ばらばらと私の體へ投付けますぢやありませんか。

はッと思ひますと、手も足も顫へる事が出来なくなつたので、何うでございませう、其のま、眞直に立つたのでございますわ。

然う致しますとお神さんは、棚の上から又一つの赤い色の蠟を出して、口を取つて又呪文を唱へますとね、黒い煙が立登つて、むら／＼とそれが、あの土間の隅へ寛がります、と其中へ、おどろのやうな髪を亂して、目の血走つた、鼻の尖つた、瘦ッこけた女が、俯向けなりになつて、ぬつくり顯れたのでございますよ。

(お雪や、是は嫉妬で狂死をした怨念だ。是を此處へ呼び出したのも外ぢやない、お前を復して遣る其の用に使ふのだ。)と申しましてね、お神さんは突然袖を捲つて、其の怨念の胸の處へ手を當てて、ずうと突込んだ、思ひますと、岸破と口が開いて、拳が中へ。

と言懸けました、聲に力は籠りましたけれども、體は一層力無げに、幾度も溜息を吐いた、お雪の顔は蒼ざめて参ります。小宮山は我を忘れて枕を牛。

「其のま、眞白な肋骨を一筋、ぼきりと折つて抜取りましてね。

(何うだ、手前が嫉妬で死んだ時の苦しみは、何と此のくらのものだったかい。)と怨念に向ひまして、お神さんが然う云ひますと、あの、其の怨念がね、貴方、上下の齒を食ひ緊つて、(う、む、う、む。)と二つばかり、合點々々を致したのでございますよ。

(可し。)とお神さんが申しますと、怨念は又曩のやうな幅の廣い煙となつて、それが段々蠟の口へ入つて了りました。

其からでございませうが。

とお雪は打戦いて、暫くは口も利けません様子。

十一

扱て其時お雪が話しましたのでは、何でも其の孤家の不思議な女が、件の嫉妬で死んだ怨念の胸を發いて抜取つたと云ふ肋骨を持つて前申します通り、釘だの繩だのに、呪はれて、動くこともありませんで、病み衰へて居りますお雪を、手とも謂はず、胸、肩、背とも謂はず、びしびしと打ちのめして、

(さあ何うだ、お前、男を思ひ切るか、それを思ひ切りさへすれば復る病氣ぢやないか、何うだ、

さあ是でも言ふ事を聞かないか、薬は利かないか。

と責めますのださうであります、其の苦しさが耐へられませぬ處から、

(御免なさいまし、御免なさいまし、思ひ切ります。)

と息の下で詫びます。それでは歸して遣ると言ふ、お雪はいつの間にか舊の閨に歸つて居り

ます。翌晩になると又昨夜のやうに、同じ女が来て手を取つて引出して、彼の孤家へ連れて来る

り、釘だ、縄だ、拔髪だ、蜥蜴の尾だわ、肋骨だわ、同じ事を繰返して、骨身に應へよと打擲す

る。

(お前、可い加減な事を言つて、些とも思ひ切る様子は無いではないか。さあ、思ひ切れ、思ひ

切ると判然言へ、是でも薬は未だ利かぬか。)

と言ふのださうでありますな。

申すまでもありません、お雪は到底も辛抱の出来る事ではないのですから、屹度思ひ切ると言

ふ。

それではと云つて歸します。

翌晩も、又翌晩も、連夜の事で屹度時刻を違へず、其の緑青で鑄出したやうな、蒼い女が遣つ

て参り、例の孤家へ連れ出すのださうであります、口頭ばかりで思ひ切らない、不埒な奴、引

摺りな阿魔めと、果は憤りを發して打ち打擲を續けるのださうでございます。

お雪は是を口にするさへ耐へられない風情に見えました。

「貴方、何うして思ひ切れませんのでございませう。私は餘り折檻が辛うございますから、確に

思ひ切りますと言ふんですけれども、又其の翌晩同じ事を言つて苦しめられます時、自分でも、

成程と心付きますが、本當は思ひ切れないのでございませうよ。

何うして是が思ひ切れませう、因縁とでも申しますのか、何う考へ直しましても、叱つて見て

も宥めて見ても、自分が自由にならないのでございませうから、大方今に責め殺されて了ひませ

う。

と云ふ、顔の蹙れ、手足の細り、たゆげな息使ひ、小宮山の目にも、秋の蝶の日に當つたら消

えさうに見えまして、

「死ぬのは些とも厭ひませぬけれども、晩に又酷い目に逢ふのかと、毎日々々それを待つてゐる

のが辛くつてなりません。貴方お察し遊ばして。

本當に慾も未來も忘れまして何うぞまあ一晩安々寐て、而して死にますれば、思ひ置く事はな

いと存じながら、それさへ自由になりません、餘りと云へば悔しうございましたのに、恚うやつ

てお傍に置いて下さいましたから、何時になう胸の動悸も鎮りまして、恚々しい事はございま

せぬ。まあ然ぞお草臥なさいまして、お眠うもございませうし、お可煩うございませうのに、つい御言葉に甘えまして、飛んだ失禮を致しました。」

人にも言はぬ積り積つた苦勞を、甚麼に胸に蓄へて居りましたか、其の容體ではなかく一通りではなからうと思ふ一部始終を、悉しく申したのであります。

曩から黙然として、唯打領いて居りました小宮山は、何と思ひましたか力強く、恰も虎を搏にするが如き意氣込で、蒲團の端を景氣能く丁と打つて、むくくと身を起し、然も勇ましい顔で、莞爾と笑ひまして、

「譯はない、姉さん、何の事だな。」

十二

「皆そりや熱の所爲だ、熱だよ。姉さんも知つてるだらうが、熱ぢや色々な事を見るものさ。疫の神だの瘡瘡の神だのと、能く言ふぢやないか、皆之は病人が其の熱の形を見るんだつさ。」

なかにも、是は些々と私が知己の者の維新前後の話だけれども、一人、踊り奉公をして、下谷邊の或お大名の奥で、お小姓を勤めたのがね、或晩お相手から下つて、部屋へ、平生よりは夜が更けて居たんだから、早速お勤の衣裳を脱いでちやんと伸して、是りや女の嗜だ、姉さんなん

ども遣るだらうぢやないか。」

「はこ。」

「まあお聞きそれから綺のお召縮緬、裏に紫縮緬の附いた寝衣だつたさうだ、其奴を着て、紅梅の扱帯をしめて、蒲團の上で片膝を立てると、お前、後毛を搔上げて、懐紙で白粉を彼方此方、拭いて取る内に、唇に障ると些いと紅が附いたらう。お小姓がね、皺を伸して其の白粉の着いた懐紙を見てるたが、何と思つたか、高島田に挿してゐる銀の平打の簪、

①が附いてゐる、是は助高屋となつた、澤村訥升の紋なんで、其を此のお小姓が、大層眞にしたんだつさ。簪をぐいと抜いて些いと見るとね、莞爾笑ひながら、そら今口紅の附いた懐紙にぐるぐると巻いて、と戴いたとまあお思ひ。

可いかい、其を文庫へ了つて、さあ寢支度も出來た、行燈の灯を雪洞に移して、此奴を持つとすつと立つて、絹の鼻緒の嵌つた層ね草履をばたく、引摺つて、派手な女だから、まあ長襦袢なんかちらりとしたらうよ。

長廊下を傳つて便所へ行くものだ。矢だの、鐵砲だの、それ大袈裟な帯が入るのだから、便所は大きい、廣い事、疊で二疊位は敷けるのだと云ふよ。其へ入らうとするとな、えへん！ともいはず歌も詠まないが、中に人のゐるやうな氣勢がするから、弗と立停つた、暫く待つても、一

向に出で来ない、氣を鎮めて能く考へると、何有、何も入つてゐるはしないやうだつたつさ。
え、姐さん變ぢやないか、氣が差すだらう。それから其のお小姓は、雪洞を置いて、ぱたりと戸を開けたんだ、途端に、大變なものが、お前心持を悪くしては可けない、是が皆病の所爲だ。

戸を開けると一所に、中に眞俯向けになつてゐた、穢い婆が、何とも云ひやうのない顔を上げて、じろりと見た、其の白髪と云ふものが一通りではない、銀の針金のやうなのが、薄を一束刈つたやうに、ざら／＼と逆様に立つた。お小姓は其ツ限。

さあ、お奥では大騒動、可恐しい大熱だから傳染でも悪し、本人も心許ないと云ふので、親許へ下げたのだ。醫者はね、お前、手を放して了つたけれども、是は日ならず復つたよ。

我に反るやうになつてから、其の娘の言ふのには、現の中ながら何うかして病が復したいと、豫て信心をする湯島の天神様へ日參をした、其の最初の日から、自分が上がらうと云ふ、那の男坂の中程に廁で見た穢ない婆が、掴み付きさうにして控へて居るので、悄然と引返す。翌日行くとお宮の鰐口に縫りさへすれば、命の綱は繋げるんだけれども、婆に邪魔をされて此坂が登れないでは、所詮是や扶からない、え、悔しいな、縦令中途で取殺されるまでも、お參を爲すに措く

ものかと、切齒をして、下じめをしつかりとしめ直し、雪駄を脱いですた／＼と登り掛けた。
遮つてゐた婆は、今娘の登つて来るのを、可恐しい顔で睨め附けたが、ひよろ／＼と擱つて、冷い手で咽をしめた、あれと、言つたけれども、最う手足は利かず、講談でもよく言ふがね、既に危き其處へ。

十三

「上の鳥居の際へ一人出て来たのが、是を見るとつか／＼と下りた、黒縮緬三ツ紋の羽織、仙臺平の袴、黒羽二重の紋附を着て宗十郎頭巾を冠り、金銀を鏤めた大小、雪駄穿、白足袋で、色の白い好い男の、年若な武士で、大小などは旭にきら／＼して、其の立派さと云つたらなかつたさうだよ。石段の上の方から、すつて寄つて、

(推參な、婆あ見苦しい。)と言ひさま、お前、疫病神の襟首を取つて、坂の下へすでんどうと逆様に投げ飛ばした、可い心持ちやないか。お小姓の難有さ、神とも佛とも唯もう手を合せて、其の武士を伏拜んだと思ふと、我に返つたと云ふ。

それから熱が醒めて、あの濡紙を剥ぐやうに、全快をしたんだがね、病氣の品に依つては随分然云ふ事が有勝のもの。

お前の女に責められるのも、今の話と同じそれは神経と云ふものなんだから、確乎して氣を確に持つて御覽、大丈夫だ、屹度那麽ものが連れ出しに来るなんて事はありやしない。何も私が學者ぶつて、お前さんがそれまでに判然した事を言ふんだもの、嘘だの、馬鹿々々しいなどは決して思ふんぢやないよ。可いかい、姐さん、何うだ、解つたかね。」

と小宮山は且つ慰め、且つ諭したのであります、然う致しますと、其の物語の調子も良く、取つた譬も腑に落ちましたものと、見えて、

「然やうでございますかね。」

と申した事は纔ながら、能く心も鎮つて、體も落着いたやうであります。

「然うとも、全くだ。大丈夫だよ、何有那樣に氣に懸ける事はない、ほんの些いと氣を取直すばかりで、那樣可怪しいものは西の海へさらりださ。」

「唯、難有う存じます、あのう、お蔭様で安心を致しました所爲か、少々眠くなつて參つたやうでございますわ。」

と言ひ難さうに申しました。

「さあ、寐るが可い、寐るが可い。何でも氣を休めるが一番だよ、今夜は附いてるから安心をおし。」

「はい。」

と言つてお雪は深く頷きましたが、靜に枕を向へ返して、暫くはものも言はないで居りましたが、又密と小宮山の方へ向き直り、

「あのう、壁の方を向いて居りますと、矢張彼處から抜け出して來ますやうで、怖くつてなりませんから、何うぞお顔の方に向かして置いて下さいましな。」

「うむ、可いとも。」

「でございますけれども……。」

「何うした。」

「あのう、極が悪うございますよ。」

とほんのり臉を染めながら、目を塞いで然も頼母しさう、力としまするやう、小宮山の胸で顔を隠すやうに横顔を見せ、床を隔てながら櫛卷の頭を下げ、口の上邊まで衾の襟を引寄せました、頓てすやくと寐入つたのであります。

其時の様子は、甚麽にか嬉しさうであつた——と、今でも小宮山が申します。扱て小宮山は、勿論寐られる譯ではありませぬから、暫くお雪の様子を見てゐたのであります。良初夜過となりました。

山中の湯泉宿は、寂然として静り返り、遠くの方でざらりと、湯女が湯殿を洗ひながら、歌を唄ふのが聞えまする。

此の界限近國の藝妓などに、たゞ此の湯女歌ばかりで呼びものになつてゐるのがあるが、怠けたやうな、淋しいやうな、然うかと云ふと冴えた調子で、間を長く引張つて唄ひますが、是を聞くと何となく睡眠劑を服まされるやうな心持で、

桂清水で手拭拾た、
是も小川の温泉の流れ。

などと云ふ、況んや巖に滴るのか、湯槽へ落つるのか、湯氣の凝つたのか、湯女歌の相間々々に、ばちやんくと響きまするに於てをや。

十四

これへ何と、前觸のあつた百萬遍を持ちましたらうではありませんか、座中の紳士貴婦人方、都育ちのお方にはお覺えはないのでありますが、三太やあい、迷イ兒の迷イ兒の三太やあいと、鉦を叩いて山の裾を廻る聲だの、百萬遍の念佛などは餘り結構なものではありませんな。南無阿彌陀佛……南無阿彌陀……南無阿彌陀。

亭主は然ぞ勝手に天窓から夜具をすつぽりであらうと、心に可笑しく思ひまする、小宮山は山

氣膚に染み渡り、小用が達したくなりました。

折角可い心地で寐て居るものを起しては氣の毒だ。勇士は替の音に目を覺ますとか、美人が袂の音に起きませぬやう、そつと拔出して用達しをしてまゐり、往復何事もなかつたのでありまするが、廊下の一方、今小宮山が行つた反對の隅の方で、柱が三つばかり見えて、其に一つ掛けてあります薄暗い洋燈の間を縫つて、ひらりと目に遮つた、不思議な影がありました。其が天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山は驚いて、入り掛けた座敷の障子を開けも遣らず、はてな、人魂にしては色が黒いと、思ひまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽つて、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留つた。是は、是は、全くおいでなすつたか知らんと、屹と見まする、黒い人魂に羽が生えて、耳が出来た、明かに認めましたのは、些いと驚くらはあらうと云ふ、大きな蝙蝠であります。

其奴が羽撃をして、ぐるりと障子に打附かつて這ひ廻る様子、其の動くに従うて、部屋の中の燈火が、明くなり暗くなるのも、思ひなし心持の所爲でありますか。

扱はは隨筆に飛驒、信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人が、病もなく一晩の内に息の根が止る事が屢々有る、其は方言飛騨と稱へ、蝙蝠に似た嘴の尖つた異形なものが、長襦袢を着て扱帯を纏ひ、旅人の目には妖艶な女と見えて、寝て居るものの懐へ入り、嘴を開けると、上下

で、口、鼻を蔽ひ、寐息を吸つて吸殺すが爲だとございます。あらぬか、それか、何にしても妙ではない、恚やうなものを間の内へ入れてはならずと、小宮山は思案をしながら、片隅を五寸か一尺、開けるが早いか飛込んで、くるりと廻つて、ぴしやりと閉め、合せ目を押へ付けて、どつこいと踏張つたのであります。暫く、しつかりと押へ付けて、様子を窺つて居りましたが、其限物音もしませぬので、先づ可かつたと息を吐き、是から静に衾の方を向きますと、豈圖らんや其の蝙蝠は座敷の中をふはり〜。

南無三寶と呆氣に取られて、目を睜つた鼻つ先を、件の蝙蝠は横撫に一つ、ばさりと當てて向へ飛んだ。
何様猫が冷たい處をこすられた時は、小宮山が其時の心持であります。何様猫もならず、苦り切つて衝立つて居りますと、蝙蝠は翼を返して、斜に低う夜着の綴絲も震ふばかり、何も知らないですよ〜と寐て居る、お雪の寝姿の周囲をば、ぐるり、ぐるり、ぐるりと三度。縫つて廻られる度に、うゝむ、うゝむ、うゝむと幽に呻いたと、見るが否や、萎れ伏したる女郎花が、無慙や風に吹き亂されて、お雪はむつくと起上りましたのであります。小宮山は論が無い、我を忘れて後に控と坐りました。
蝙蝠は翻つて、向側の障子の隙間から、ひら〜と出たと思ふと、お雪が後に跟いてすつと。

蚊帳を出でて未だ障子あり夏の月、雨戸を開けるでもなく、唯風の入るばかりの隙間から、體がすつと細くなり、水に映つる柳の蔭の隠れたやうに、ふと外へ出て見えなくなりましたと申しますな。勿論、蝙蝠に引出されたんで。

十五

小宮山は切齒をなして、我赤檜を割つて八角に削りなし、鐵の輪十六を嵌めたる棒を携へず、彦四郎定宗の刀を帯びず、三池の傳太光世が差添を前半に手扱ますと雖も、男子だ、然かも江戸ッ兒だ、一旦請合つた女をむざ〜魔に取られてなるものかと、追駆けざまに足踏をしたのであります。生憎神通がないので、是は當然に障子を開け、又雨戸を開けて、縁側から庭へ寝衣姿、跣足のまゝで飛下りる。

戸外は眞晝のやうな良い月夜、蟲の飛び交ふさへ見えるくらゐ、生茂つた草が一筋に靡いて、白玉の露の散る中を、一文字に駈けて行くお雪の姿が、早や小さくなつて見えます。
小宮山は蝙蝠の如く手を擴げて、遠くから組んでも留めむす勢。
「おうい、おうい、お雪さん、お雪さん、お雪さん。」
と聲を限り、是や串戯をしては可けないぜと、思はず獨言を言ひながら、露草を踏しだき、薄

を搔分け、刈萱を押遣つて、章駄天のやうに追駈けまする、姿は草の中に見え隠れて、恰も是れ月夜に兎の踊るやう。

「お雪さん、おうい、お雪さん。」

間も良近くなり、聲も届きましたか、お雪は弗と歩を停めて、後を振り返ると兩の手を合せました。助けてくれと云ふのであらう、哀れさも、不便さも恚ばかりなるは、と駈け着ける中、操の糸に掛けられたやう、お雪は、左へ右へ踳踳して、しなやかな姿を揉み、しばらく争つて居るやうでありました。けれども、又、颯と駈け出して、あはやと云ふ中に影も形も見失つたのであります。

處へ、彼の魚津の沖の名物としてありまする、蜃氣樓の中の小屋のやうなのが一軒、月夜に灯も見えず、前途に朦朧として顯れました。

小宮山は三藏法師を攫はれた悟空と云ふ格で、きよろ／＼と四邊を向して居りましたが、頂は遠く、四邊は曠野、縱令蝙蝠の翼に乗つても、虚空へ飛び上る法ではあるまい、瞬一つ爲切らぬ中、お雪の姿を隠したは、此家の内に相違ないぞ、這奴！ 小川山の妖怪ごさんなれと、右から左へ、左から右へ取つて返して、小宮山は此家の周圍をぐる／＼と廻つて窺ひましたが、敢て要害を見るには當らぬ。何の蝸牛見たやうな住居だ、此の中に踏み込んで、罷り違へば、鼓を背負

つても逃げられると、高を括つて度胸が坐つたのでありますから、威勢よく突立つて凜々とした大音聲。

「お頼み申す、お頼み申す！ お頼み申す!!」

と續けざまに聲を懸けたが、内は森として應がない、耳を澄ますと物音もしないで、却つて遠くの方で、化けた蛙が固まつて鳴くやうに、南無阿彌陀佛々々々々々々、南無阿彌陀佛々々々々々々、と百萬遍、眉を擡めた小宮山は、癪に障るから苛立つて喚いたり。

「お頼み申す。」
すると、何うでございませう、鼻ッ先の板戸が音もしないで、すらりと開く。

「騒々しいぢやないかね。」
顔を出したのが、鼻の尖つた、目の鋭い、可恐しく丈の高い、蒼い色の衣服を着た。凄い年増。

一目見ても見紛ふ處はない、お雪が話した其なで。

小宮山は思はず退つた、女は其の我にもあらぬ小宮山の天窓から足の爪尖まで、じろりと見て、片頬笑をしたから可恐しいや。

「おや、おいでなさい、柏屋のお客だね。」
言語道斷、先を越されて小宮山はとぼんと致し、

「へい。」と言つて、目をぱちくりするばかりであります。
「まあ、御苦勞様だつたね。曩から來るだらうと思つて、甚麼に待つてゐたか知れないよ。さあまあ此方へお上りなさい、少し用があるから。」
と言つた、文句が氣に入らないね、用があるなんざ容易でなささう。

十六

相手は女だ、城は蝸牛、何程の事やある、何うとも勝手に爲やがれと、小宮山は唐突かれて、度膽を擱まれたのでありますから、少々捨鉢の氣味これあり、臆せず後に續くと、割合に廣々とした一間へ通す。燈火はありませんが暗いやうな明るいやうな、疊の數も能く見える、一體其の明がと云ふと、女が身に纏つてゐる、其の眞蒼な色の着物から膚を通して、四邊に射擴がるやうに思はれるのであります。
「些いと託ける事があるのだから、折角見えたものを情なく追歸すのも、お氣の毒だと思つて、通して上げましたがね、熟として待つて居なさい。私の方に支度があるのだから、お前さん又大きな聲を出したり、威張つたり、お騒ぎだと爲になりませんよ。」
と頭から呑んで懸つて、其のまゝ、何處かへ、すい。

呑まれた小宮山は、怪しい女の胃袋の中で消化れたやうに、蹲つて其へ。
南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、風が引いたり寄せたりして聞えます、百萬遍。
忌々しいなあ、道中ぢや彌次郎兵衛も是に弱つたつけ、耐つたものではないと、密と四邊を胸しますると、塵一ツ葉も目を遮らぬ此の間の内に床が一つ、草を銜へた神農様の像が一軸懸つて居りますので、小宮山は譯が解らず、何でも是は氣を落着けるに若く事なしたと、下ツ腹へ力を入れて控へて居ります。又しても百萬遍。小宮山は其を聞くと悪寒がするくらゐ、聞くまい、聞くまいとする耳へ、ひいひい女の泣聲が入りました。屹となつて、さあ始めやがった、那ン畜生、又肋の骨で遣つてゐるな、此の儘ぢや居られないと、突立ちました小宮山は、早く既にお雪が話の内の一員に、化し了したのであります。
其の場へ踏み込み扶けてくれうと、突然隔の襖を開けて、次の間へ飛込むと、廣さも、様子も同じやうな部屋、又同じやうな襖がある。引開けると何もなく、矢張り六疊ばかりの、廣さも、様子も、又襖がある。がたりと開ける、何もなくて少しも違はない部屋であります。
阿房宮より可恐しく廣いやと小宮山は顛倒して、手當り次第に開けた。幾度遣つても筍の皮を剥くに異ならずでありますから、呆れ果てて挫と尻餅、茫然四邊を向しますると、神農

様の畫像を掛けた、曩女が通したのと同じ部屋へ、おやくおや。又南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と耳に入ると、今度は小宮山も釣込まれて、思はず南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。其時すらりと襖を開け、

「誰方だい、今お騒ぎなすつたのは。」

「へい。」といった、後はもうお念佛になりさうな、小宮山は恐るゝ、女の微笑んで居ります顔を見て、何うか慙うか、まあ殺されずに濟みさうだと、思ふばかりでございまする。

「一體物好で恁處所へ入つて來たお前さんは、怖いものが見たいのだらう。少々ばかりね。」

「いえ、何。」と口の内。

「まあ、おいでなさい。」

妾に跟いて此方へと、宣示すが如く大様に申して、肅然と立つて導きますから、詮方なしに跟いて行く。土間が冷く踵に障つたと申しますると、早や小宮山の顔色蒼然！

話に聴いた、青色の其の燈火、其の臺、其の荒筵、其の四邊の物の氣勢。

お雪は臺の向へしどけなく、崩折れて仆れてゐたのであります。女は臺の一方へ、此の形なしの江戸ッ兒を差置いて、一方へお雪を仆した真中へぬツくと立ち、袖短な着物の眞白な腕を、筵の上へ長く差し伸して、ざくりと釘を一ト擱。

「何うだね、お客様。」

「何う致しまして。」

小宮山は慇懃に辭退をいたしまする。

十七

「是を知つて居なさるかへ。」

と二の腕を曲げて、件の釘を乳の邊へ齎して、掌を擴げて据ゑた。

「何う致しまして。」

「知らない？」

「いえ、何、存じて居ります。」

「それぢや是は。」

「へい。」

「女の脱髮。」

小宮山は慌しく、

「何う致しまして。」

「それぢや御覽。」

と撮んで宙で下げたから、そ、げた黒髪がさらりと動きました。

「いえ、何、存じて居ります。」

「是は。」

「存じて居ります。」

「それから。」

「存じて居ります。」

「それでは、何の用に立つんだか、使ひ方を知つて居るのかへ。」

迂濶知らないなぞと言はうものなら、使ひ方を見せようと、此の可恐しい魔法の道具を振廻されては大變と、小宮山は逸早く、

「え、最う存じて居りますとも。」

と一際念入りに答へたのであります。言葉尻も終らぬ中、繩も釘もはらりと振り掛つた、

小宮山はアツとばかり。

些いと皆様に申上げますが、此處で何うぞ貴方がたがあツと仰有つた時の、手附、顔色に體の工合をお考へなすつて下さいまし。小宮山は結局、あツと言つた手、足、顔、其のまゝで、指

の尖も動かなくなつたのであります。

「よく御存じてございましたね。」

と嘲弄する如く、態と丁寧に申しながら、尻目に懸けてにたりとして、向へ廻り、お雪の肩へ其の白い手を掛けました。

畜生！ 飛附いて扶けようと思つたが、動ける處の沙汰ではないので、人は恚やうな苦しい場合にも自ら馬鹿々々しい滑稽の趣味を解するのであります、小宮山は餘の事に噴出して、我と我身を打笑ひ、

「小宮山何と云ふがまだ、宛でこりや木戸錢は見てのお戻りと云ふ風だ、東西、と肚の内。」

女はお雪の肩を揺動かしましたが、何とも不思議な凄しい聲で、

「雪や、苦しいか。」

お雪はいとど俯向いて居た顔を、がつくりと俯向けました。

「うむ、もう可い、今夜は酷い目に逢はしやしないから、心配をする事はないんだよ。是まで手を變へ、品を變へ、色々に見たが、何うしてもお前は思ひ切らない、何思ひ切れないのだな、それならそれで可いやうにして上げようから。」

と言聞かしながら、小宮山の方を振り向いたのであります。

「お客様、お前は性悪だよ、此子が其が爲に此の通りの苦勞をして居る、篠田と云ふ人と懇意な
のぢやないか、それなのにさ、道中荷が重くなると思つて、託も聞かうとはせず、知らん顔をし
て聞いて居たらう。」

と鋭い目で熟と見られた時は、天窓から、悚然として、安本龜八作、小宮山良助あつと云ふ體
にござりまする活人形へ、氷を溶せたやうになりました。

「其換り少しばかり、重い荷を背負はして上げるから、大事にして東京まで持つて行きなさい。
託と云ふのは其なんだがね、お雪は到底も扶らないのだから、私も今まで乗懸つた舟で、此娘
の魂をお前さんにおんぶをさして上げるからね、密と篠田の處まで持つて行くのだよ。然ぞまあ
お邪魔でございませうねえ。」

十八

小宮山が其の形で突立つたまゝ、口も利けないのに、女は好きな事をほざいたのであります。

其から女は身に纏つた、其の一重の衣を脱ぎ捨てまして、一絲も掛けざる裸體になりました。
小宮山は負惜、此奴温泉場の化物だけに裸體だと思つて居ります。女は又一つの青い色の鱗

を取出しましたから、是から怨念が顯れるのだと恐を懐くと、豫て聞いたとは様子が違ひ、是は
掌へ三滴ばかり仙女香を使ふ鹽梅に、兩の掌でびたゝと揉んで、肩から腕へ塗り付け、胸か
ら腹へ塗り下げ、襟耳の裏、頓ては太股、脹脛、足の爪先まで、隈なく塗り廻しますると、眞直
に立上りましたのであります。

小宮山は肚の内、

「東西。」

女は然う致して、的面に臺に向ひまして、ちゝんぷいゝ、御代の御寶と言つたのだから何だか
解りませぬが、口に怪しい呪文を唱へて、ばさりゝと雙の腕を、左右へ眞直に伸したのを上下
に動かしました。體がぶるゝと顛へたと見るが早いか、搔消す如く裸身の女は消えて、一羽
の大蝙蝠となりましてございします。

例の如くふはゝと兩三度土間の隅々を縫ひましたが、突然俯けになつて居るお雪の顔へ、顔
を押當て、翼で其の細い項を抱いて、仰内けに嘴でお雪の口を壓へまして、すう、すうと息を吸
ふのであります。

是を見せられた小宮山は、はつと思つて息を引いたが、如何ともする事叶はず、依然として其
のあつと云ふ體。

二度三度、五度六度、良有つて息を吸取つたと見えましたが、お雪の體は死んだもののやうになつて確と横様に仆れて了ひました。

喫驚仰天は之のみならず、蝙蝠がすつと来て小宮山の懐へ、ふはりと入りましたので、再びあつと云つて飛び上ると同時に、心付きましたのは、舊の柏屋の座敷に寝て居たのであります。大息を吐いて、蒲團の上へ起上つた、小宮山は、自分の體か、人のものか、能くは解らず、何となく後見らるゝやうな氣がするので、振返つて見ますると、障子が一枚、其外に雨戸が一枚、明らさまに開いて月が射し、露なり、草なり、野も、山も、渺々として、鶏、犬の聲も聞えませぬ。何よりも先づ氣遣はしい、お雪はと思ふ傍に、今息を吸取られて仆れたと同じ形になつて、生死は知らず、姿ばかりはありました。

小宮山は冷たい汗が流れるばかり、南無阿彌陀佛々々々々々々、南無阿彌陀佛々々々々々々、と隣で操り進む百萬遍の聲。

「姐さん、姐さん、」

小聲で呼んで見たが返事がないので、若しやともう耐らず、夜具の上から揺振りしました。

「お雪さん。」

三聲ばかり呼ぶと、細く目を開いて小宮山の顔を見るが否や、然もく物に恐れた様子で、飛

着くやうに、小宮山の帯に絶り、身を引緊めるやうにして、坐つた膝に突伏します。戦く背中を小宮山は緊乎と抱いた、様子は見届けたのでありますから、哀れさも又百倍。怖さは小宮山も同じ事、お雪の背中へ額を着けて、夜の明るるのをたゞ、一刻千秋の思で待構へまする内に疲れた所爲か、我にもあらずそろ／＼と睡みましたと見えて、目が覺めると、月の夜は變り、山の端に晴々しい旭、草木の露は金色を鏤めて居りました。密と膝から下すと、お雪は矢張り其のまゝに、すやくと寐入つて居る。

「お早うございます。」
と聲を懸けて、機嫌聞きに亭主が眞先、百萬遍さへ止みますれば、此の親仁大元氣で、頓てお鐵も參り、

「お客様お早うございます。」

十九

小宮山は早速嗽手水を致して、心持も薩張りましたが、右左から亭主、女共が問ひ懸けます。昨晚の様子は、否、唯お雪が些いと壓されたばかりだと言つて、仔細は明しませんでございます。是は後の事を慮つて、皆が恐れ氣なくお雪の介抱を爲て遣る事が出来るやうにと、氣を着け

たのであります。

お雪の病氣を復すにも怪しいものを退治るにも、普婆扁鵲に及ばず、宮本武藏、岩見重太郎にも及ばず、たゞ篠田の心一つであると思ひましたので、未だ、二日三日も居て介抱もして遣りたかつたのではありますけれども、小宮山は自分の力では及ばない事を知り、何よりも先づ篠田に逢つてと、恚う存じましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

其の柏屋を立ちます時も、お雪は未だ昨夜の儘寝て居たのであります。失禮な起しませうと口々に騒ぐを制して、朝餉も別間に於いて認め、お前さん方が何も恐がる程の事はないのだから、大勢側に附いて看病をしてお遣んなさいと、暮々も申し残して後髪を引かれながら。

其日、糸魚川から汽船に乗つて、直江津に着きました晩、小宮山は夷屋と云ふ本町の旅籠屋に泊りました、宵の口は何事も無かつたのであります。眞夜中に弗と同じ衾にお雪の寝て居るのを、歴々と見ましたので、喫驚する途端に、寝姿が向むきになつた其の櫛巻が溢れて、疊の上へざらりと云ふ音。

枕に着かる、處ではありませぬ、あ、越中と越後と國は變つても、女の念は離れぬかと豈夫に魂を託つたとまでは、信じなかつたのでありますけれども、熟く溜息をしたのであります。夜が明けると、一番の上り汽車、是が碓水の隧道を越えます時、其の幾つ目であつたさうで。

小宮山は何心なく顔を出して、眞暗な道の様子を透して居ると、山清水の滴る隧道の腹へ、汽車の室内の灯で、其顔が映つたのであります。と竝んで女の顔が映りました。確に其がお雪の面影。

其限何事もなく、汽車は川中島を越え、浅間の煙を望み、次第に武藏の平原に近づきます。

上野に着いたのは午後の九時半、都に秋風の立つはじめ、熊谷土手から降りたのが其時は篠を亂すやうな大雨でございまして、俾の便も得られぬ處から、小宮山は旅馴れては居る事なり、蝙蝠傘を差したまゝで、湯島新花町の下宿へ歸らうと云ふので、あの切通へ懸りました時分には、ぴつたり人通りがございませぬ。後から、

「姐さん、参りませうか、姐さん。」

と聲を懸けたものがある。

振返つて見ると誰も居ませんで、たゞざあざつと云ふ雨に紛れて、轍の音は聞えませぬが、一名の車夫が跟いて來たのであります。

小宮山は慄然として、雨の中に其のまゝ、立停つて、待てよ、或はこりや託つて來たのかも知れぬと、悚然としましたが、何しろ、自宅へ背負ひ込んで妙ならずと、直ぐに歩を轉じて、本郷元町へ参りました。

「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、其ままでまあ君心を鎮めて待つてくれ。」

「え、お雪さんが、甚麽様子で。」
「實は今夜本を見て起きて居ると、唯た今だ、頻にお頼み申しますと言ふ女の聲、誰に用があつて来たのか知らぬが、此の雨の中を然ぞ困るだらうと、僕が下りて行つて開けて遣つたが、見るとお雪ぢやないか。小宮山さんと一所だと言ふ、體は雨に濡れてびつしより絞るやう、話は後からと早速此處へ連れて来たが、那の姿で坐つて居た、疊も未だ濕つて居るだらうよ。」

と篠田はうろくしてはたく、疊の上を撫でて見ます。此様子に小宮山は、暫く腕組をして、黙つて考へて居ましたが、開き直つたと云ふ形で、
「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、其ままでまあ君心を鎮めて待つてくれ。」

「おや、」と言つて、きよろ／＼四邊を向して居りますが、何か氣拔のしたらしい。小宮山はすつと寄つて、其の背を叩かぬばかり、
「何うした。」

「最う何も彼も御存じの事だから、些とも隠す事はない、たゞ感謝するんだがね、君が連れて来て一足先へ入つたお雪が、今まで此處に居たのに、何處へ行つたらう。」
と眞顔になつて申します。
小宮山は又悚然とした。

「え、お雪さんが、甚麽様子で。」
「實は今夜本を見て起きて居ると、唯た今だ、頻にお頼み申しますと言ふ女の聲、誰に用があつて来たのか知らぬが、此の雨の中を然ぞ困るだらうと、僕が下りて行つて開けて遣つたが、見るとお雪ぢやないか。小宮山さんと一所だと言ふ、體は雨に濡れてびつしより絞るやう、話は後からと早速此處へ連れて来たが、那の姿で坐つて居た、疊も未だ濕つて居るだらうよ。」

と篠田はうろくしてはたく、疊の上を撫でて見ます。此様子に小宮山は、暫く腕組をして、黙つて考へて居ましたが、開き直つたと云ふ形で、
「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、其ままでまあ君心を鎮めて待つてくれ。」

それぢや託り物を渡したぜ。」

「え。」

「否、託り物は渡したんだぜ。」

「託り物つて何だ。」

「今受取つた其さ。」

「何を、」と篠田は目も据らないで慌てて居ります。

「まあ、受取つたと言つてくれ。左も右も言つてくれ、後で解る事だから頼む、後生だから。」

魂の請状を取らうと爲るのでありますから、其の掛引は難かしい、無暗と強ひられて篠田は夢

現とも辨へず、それぢや然うよ、請取つたと、挨拶があるや否や、小宮山は篠田の許を辭して、

一生懸命に駈出した、さあ荷物は渡した、東京へ着いたわ、雨も小止みか此奴は妙と、急いで我

家へ。

翌日取も置かず篠田を尋ねて、一部始終悉しい話を致しますると、省みて居所も知らさないで

居た篠田は、蒼くなつて顫へ上つたと申しますよ。

是から二人連名で、小川の温泉へ手紙を出した。一週間ばかり経つて、小宮山が見覺のある彼

の肌に着けた浴衣と、其時着て居りました、白粉垢の着いた給とを、小包で送つて来て、あはれ

お雪は亡くなりましたと云ふ添状。篠田は今でも獨身で居ります。二人とも其の命日は長く忘れ

ませんと申すのであります。飛んだ長くなりまして、御退屈様、濟みませんでございました、失禮。

昭和十五年三月二十五日印刷
昭和十五年三月三十日發行
四月二日

鏡花全集第五卷

著者

泉

鏡

太

郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

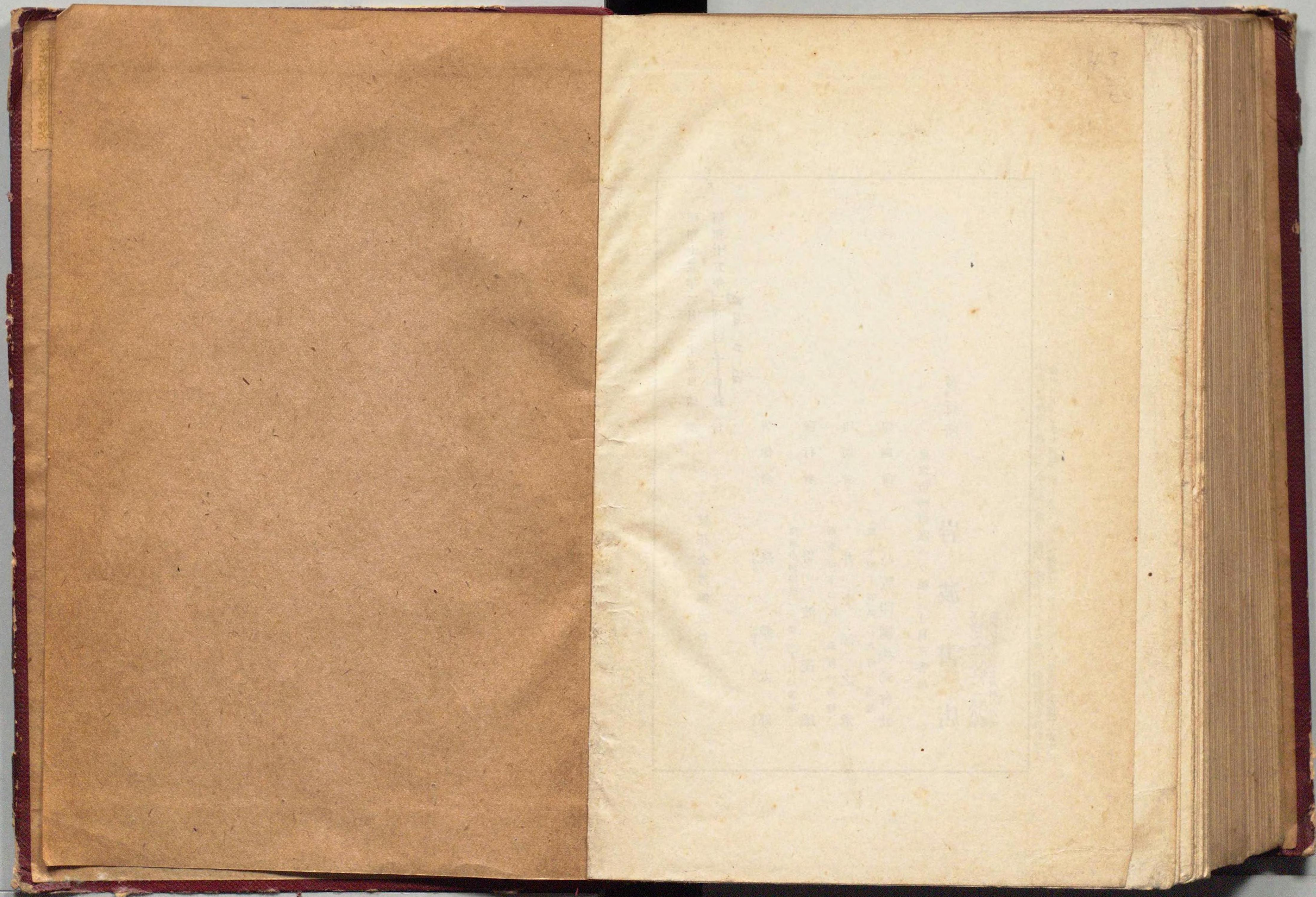
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所
岩波書店

電話(33)一八七・一八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありましたら、御手数から洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましたも、早速お取替致します。

(寺島製本)



798

167

